

闘う三里塚



千葉県反戦青年委員会 三里塚現地闘争本部

闘う三里塚

目次

三里塚闘争勝利のために

七〇年における頂点の三里塚闘争

三里塚芝山連合反対同盟委員長 戸村 一作

三里塚空港は絶対許してはならない

三里塚芝山連合反対同盟副委員長 石橋 政次

三里塚の地から

三里塚青年同盟行動隊長 萩原 進

いまこそ実力闘争の真価を！ 空港粉碎闘争の勝利をかちとろう

千葉県反戦青年委員会議長 中野 洋

三里塚国際空港建設及び拡張予想図

1. 農地収奪と戦争への道——三里塚国際空港を粉碎せよ

- 1) 三里塚国際空港閣議決定の経過
- 2) 補助空港から軍事転用可能な巨大空港建設へ
- 3) 日米安保体制強化のねらいと三里塚空港建設計画

2. 収奪される農地，破壊される農村

- 1) 欺瞞的な空港公団の条件
- 2) 去るも地獄，残るも地獄の農業政策
- 3) 日本帝国主義と農村——日本農村の危機の上に立つ三里塚闘争

3. 闘いの記録

- 1) 反対同盟結成と条件二派の登場
- 2) 実力阻止の闘いへ——全学連，反戦青年委員会との連帯と日本共産党の闘争妨害
- 3) 三里塚，芝山農民の闘争から全国的闘いへ
- 4) 立ち入り測量阻止の闘い——激しく続いた現地での闘い
- 5) 関連事業農民も含んだ闘いへ——来るべき敵の大攻勢にそなえ闘う準備の強化を

反戦青年委員会現地闘争本部からのアピール

4. 資料

- ・ 騒音問題
- ・ 声明文，その他
- ・ 現地案内

千葉県反戦青年委員会三里塚現地闘争本部

三里塚闘争勝利のために

三里塚と芝山農民の闘いは今年で四年目をむかえる。一九七一年春にA滑走路（四千メートル）の完成をめざす空港公団側は、工事着工期限の迫った今年、この農民の上に新たな大攻撃を加えて来るだろう。そして公団が空港建設をやめない限り、三里塚・芝山農民四千余名の実力阻止闘争の爆発するのは間違いない。

昨年一年間、三里塚と芝山は激動の一年ともいえるべき時間を過した。一年間の闘いの苦しみと困難さは、闘いを通じて既成の支配秩序をもうち破ってくる努力であった。それは佐藤自民党政府の農村支配に對する反逆の闘いであった。

六七年の十一・三闘争に始まる反戦青年委員会、全学連との連帯。六八年二・二六闘争を開始とする幾千の労働者、学生との結びつきと、成田空港公団分室への闘争は、三里塚闘争を全国化させたのみならず、七〇年安保再改定、七一年国際空港建設と、支配者が望む帝国主義的支配強化の意図をあますところなくあばきだした。

羽田、佐世保、王子とならんだ三里塚の闘いは七〇年安保粉砕に向けて避けることのできない闘いであったのである。

空港問題に端を發した三里塚・芝山農民の闘争はそれを通じて、こんにち農村に、いかに大きな矛盾が集中しているかを暴露した。

工場用地、港湾、空港、道路、そして軍事施設設置による農地収奪と農村破壊。一年毎に変貌する農業政策。結果としてそれは、幾多の農民の存続を危くさせる。

己が生きるためには、農民として生きるためには、支配機構そのものと対決しなければならない。この事こそ保守政治基盤の農村に、旧来の自己の瓦解を迫った現実的基礎であった。そして数回となく週刊紙やグラビアにも取りあげられ、映画化もされた、かの六八年四月から七月に

たる「三里塚の夏」に現われた農民の土着したエネルギーともいえる闘争力は、保守政治体制に対する農民の闘争宣言であった。

そしてこれは結局のところ保守政治の存続を温存するわけのわからない日本共産党の農業の民主的経営論や、実力闘争否定論とは決して相容れないものであった。

三里塚と芝山の農民が、全学連や反戦青年委員会と連帯し、成田空港公団分室への闘争を爆発させ、四月から七月の三カ月間、数十回の実力阻止闘争を実現して来たのは当然のことであったのだ。「実力阻止をやると乱暴でいけねえとか、人に迷惑がかかるっていうけど、それにあ、まやかしかがあるっべ」

六八年日本の全土を揺るがして闘われたすべての闘争の課題は、何ひとつ解決されぬまま年を越した。佐藤政府は、それを何んとか穏やかにすませるために、様々の懐柔や、実力行使を行なおうとしている。

しかし三里塚闘争ひとつとってみても、佐藤政府が、全面的に屈服し、敗北しないかぎり、解決の方策はあり得ない。

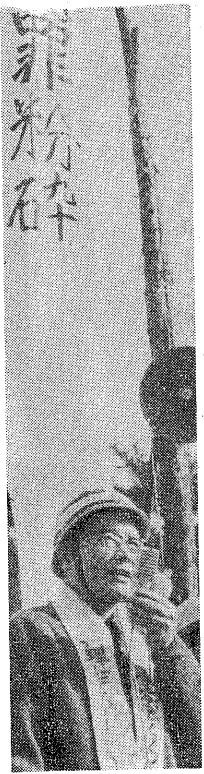
全ての課題がこの六九年を通じて七〇年に収斂されようとしている。

そして今年こそ勝利をめざして前進する三里塚、芝山農民の闘いは、その重要な一翼を担うであろう。

われわれは過ぐる一年有余、三里塚・芝山の人々と共に闘い全国的闘いへと発展させる一助になりえたと考えている。

われわれがこの闘いの第一集を通じて全国の仲間に訴えたい事は、われわれ反戦青年委員会こそ三里塚芝山農民に応える実力阻止闘争に立ちあがらなくてはならないということである。労働者階級こそ、農民にもましてその闘いの先頭に立たねばならないのだ。この第一集がその一助になれば幸いである。

最後に発刊に当って幾多の協力をしていただいた反対同盟のみなさん、全学連現地闘争本部の学生諸君に對し、心から感謝したい。



三里塚芝山連合反対同盟

委員長 戸村 一作

六八年二月二十六日

成田市営グラウンド

七〇年における頂点の三里塚闘争

闘いに不可欠のものは何か。まず闘いあるのみである。支配権力者に対決する者の不屈の闘争意欲のみが、やがて闘いのすべてを決定するのだと思う。闘いは単なる主観的勝利感ではない。あくまでも血肉の中に生きることであり、実践としての闘いの論理がなければならぬ。

生きんとする者は、闘いに身を徹しなければならぬ。真剣勝負である。生か死かの闘いである。全生命をこの二つのいずれかに賭けるのである。だから国家権力に対抗する決死的決意が創意ある実力行使を生むのは必至である。これは死を意味しない。生きることである。

ところがここに卑劣な政党的エゴイズムが台頭した。——共説である。彼等は闘いの中の奇型児であって、口に反戦平和を唱え、国家権力におびえつつ、闘う者にゲバ棒を振り下すほどの、支配権力を上廻る暴挙を敢えてする。彼等の説く「民主連合政府の樹立と議会政治」。「通告書による安保廃棄」などの政策は、兇戯にもひとしい安易性に、大衆の闘いを韜晦せんとするものである。

或る共産党員は私に手紙を寄せて「火焰ビンなどによる過去における共産党の失敗が……」と語っているが、四〇年の歴史と自称する日共とは思えないほどの不甲斐なさとその転向振りである。ここに今日の日共説とは、その根底に全く相いれない

闘いの分岐点があり、帰するに日共説は大衆を餌食とする政党的エゴイズムの典型的な現れである。

私達の闘いはこれと全くその本質を異にした闘いであり、支配階級に迎合しない徹底的闘争の基盤を、支配権力との実力行使におくのである。実力行使とは国家権力の人民に用いる武装の暴力に対する対物的暴力をいうのではない。しかし一丁の原始的農具は自他ともに農民の生命を守るためには、敵権力者の首を断ち切る偉力をもつものでも知らなければならぬ。闘いの基盤において絶えず非迎撃的な闘争精神とその決断を欠いてはならない。

権力者の圧制は農民の怒りを、いよいよその絶頂に立たしめるであろう。農民の怒りは未だ端緒的なものであるが、これからの権力者の出方による険悪な事態の発生はまぬかれぬであろう。農民をしてかかる事態にまで導いた支配権力者の圧制はゆるし得ない。農民の階級意識は闘いの中で、ますます高揚し住民不在の圧制政治とその不信の怒りを、自民党佐藤政府の打倒に結集してゆくのである。単なる三里塚の一地域の闘いでないことは、すでに明確な事実である。現実に三里塚闘争は全国の基地闘争、学生運動、反戦運動と呼応し、七〇年安保打破の闘争に向けて、その頂点に立つてであろう。三里塚闘争の重大な使命感に今更の如く自ら打たれるのである。

いへとはいりこんだからだ。機動隊の嚴重装備。

午後二時反対同盟、全学連、反戦青年委員会、市民の三千名の部隊は頭上に位置する公団分室へ突撃した。わきあがる市民の大歓声。衝突する肉体と重装備の機動隊。飛びかう石。発射される装甲車の放水。

「おっ。おっ。おっ。おっ。」必死に攻防する反対同盟。そして機動隊は後退をした。一人残された飯高成田署長の進め進めの号令は、後を向いた機動隊には聞えていない。

再び成田市営グラウンド、ずぶぬれになった学生と労働者と農民はお互に顔を見合せていた。「俺達は、この異常な状況の重荷に勝ったのだ」。

俺達は親戚だな。だが、いずれにしても三里塚闘争の本当の厳しさはこれから始まるのだ。

この日反対同盟委員長戸村一作氏はデモ隊の先頭で、警棒の乱打による重傷



三里塚空港建設は

絶対に許してはならない

新空港を三里塚、芝山地区に設置すると閣議決定したのは、昭和四一年七月であった。

その後三里塚、芝山連合反対同盟は、数々の闘争を組織し、団結を固め闘って来た。

全国の強烈な支援、援農を受け、とくに、全学連、反戦青年委員会の現地闘争本部員の常駐員を迎えて、昨年の二・二六闘争以来、数回の総決起集会を三里塚現地で行って成功させ、政府公団の用地買収、ボーリング調査を完全に粉砕した。

政府は、空港設置について、われわれ農民の生活が、これまでもよりも一層向上するようなことをいい、農地買上げを行なうとして来た。だが空港公団員に農業の事がわかるか、あるいは机の上で考えた事で農業の事がわかるか、春になにが獲れ、夏や秋には何をつくるのかさえ知らない政府の役人に農民の気持はわからない、政府空港公団のいうことがデータラメである事は今、はっきりしているのだ。

われわれ三里塚、芝山農民は、安保条約下の数々の基地を私物として、日夜ベトナム侵略に使用し、なお足りぬため、羽田を軍事基地として使っている今日、第二の羽田になる三里塚空港は絶対に阻止しなくてはならない。

三里塚芝山連合反対同盟

副委員長 石橋 政次

第二次大戦の事をふり返っても、一家離散や、食糧危機の大混乱に陥ったことは、はっきりしている。

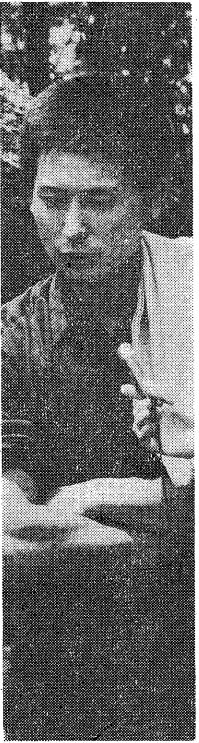
悲惨な戦争は許してはならないのだ。昨年四月から七月まで、空港公団は現地に数百名の機動隊を常駐させ、部落協や、地権者会等々の立入りの調査を行なって来た。機動隊は、農民、学生、労働者に対して弾圧を加え、国家権力の本質を暴露した。

国民の生活を守るべき警官が、無防備の農民に対し、また農民が生活を守ろうとする事に対して弾圧することは絶対に許せない。

昨年十二月二十日、十三年間、滑走路の拡張と闘って来た砂川は勝利した。砂川の農民は頑張り抜いて勝ったのだ。同じ農民として実に身近な勝利だと思ふ。

われわれは砂川の教訓を学び、必ず百害あって一利ない空港を粉砕しなければならぬ。この四四年に、公団が攻撃を加えて来る事は明らかである。三里塚、芝山農民は身命を賭してこれと闘いたい。

激闘の三里塚に全国の労働者、学生、反戦青年委員会、農民の支援をお願いしたい。



三里塚青年同盟行動隊長

萩原 進

三里塚の地から

三里塚の地よりすべての闘う諸君に対して、血より発する呼びと共に闘う者にしかわからぬあえな連帯のあいさつを送りたい。

三里塚空港粉砕闘争がもはや三年を経過するに至りいかに、苦しくとも、長くとも、困難であろうとも闘いぬく事によりそれらは、解決される問題にすぎないし、闘いぬかなければならなくなる事を、今日までの闘いが教えてくれた。

そこで勝利を絶対的に我々の手に収めなければならぬ事が必須条件である。「良く闘いぬいた」、「全力を尽して闘った」だけではならないのである。これが具体的課題である三里塚粉砕闘争を今日まで闘いぬいた我々の真の姿である。

闘いは自らの力の限界を知るためではなく、唯に自らの教育強化の場でもない。死をも覚悟した上でいかに生きぬくか、究極の時点において、自らの限界を無限にするかが闘いそのものであるかと思う。一時的感情に走っては、ならず、短期的願望路線、表面的現象面による判断による考え方で闘いにくくむ様な事ではならない。

三里塚空港粉砕闘争も三年目にして本質的階級闘争として登場するに至り、内部的にも、三里塚芝山農民が三里塚空港粉砕闘争の偉大さを理解する事が出来、新たな農民像の形成の段

階を迎えるにあたり、三里塚に根を下ろした闘う労働者、学生、との真の労働学提携が問われる時点に達した。今日、反戦闘争の最も高揚時において、しかも、三里塚空港粉砕闘争そのものが、七〇年闘争そのものであり反戦闘争そのものである非常に強大なものは、深幅のある闘いである事は、闘いの歴史を紐解いてみても見当たらないのが、三里塚空港粉砕闘争ではないだろうか。

しかも日本の農民階層の現実が最も反動的部分として今日もなお存在する中において、自らの立場を的確に見極めて、権力体制に向って闘いを挑むに至った農民の真念、真情、情念、をいかに労働者学生が吸収して自分のものとするか問われる場であるし、労働者、学生、農民との接点をどこに定めるかによって、三里塚空港粉砕闘争の意義の差が生じる決果となる事であるが、現実の闘いの中で解決される問題である。

激闘を経て又激闘を迎えようとしておる今日、昨年の11/24ボウリング実力粉砕第一波闘争による盛り上りを大幅に上回る軍事的力量を持ち備えた闘う部隊の編成と、三里塚結集を画り、ボウリング第二波闘争を政治的にも軍事的にも圧勝する闘いを展開する事をすべての闘う諸君と確認し、三里塚空港粉砕勝利のために断固闘いぬくことを訴えたい。

いまこそ実力闘争の真価を！ 空港粉砕闘争の勝利をかちとろう

千葉県反戦青年委員会議長 中野 洋

決戦の年一九六九年を迎え、三里塚闘争を闘う地元千葉県反戦青年委員会より全国のたまたかう労働者諸君に連帯のあいさつをおくりします。

三里塚空港粉砕闘争が始ってから、はや四年目をむかえ、この間の地元反対同盟を中軸とする実力闘争のなかで、政府公団の空港建設計画は大巾に遅延をよぎなくされ、いまや極めて重大な段階をむかえています。七一年完成を至上命令とする政府公団は、必死のまきかえしをはかろうとしてきています。そして、今春三月事業認定、次いで四月より資材運搬道路等関連工事開始、ボーリング測量強行、四千米滑走路地点の土地収用法適用強行を次々とねらっており、九月本工事開始を公然と発表しました。

こういふ状況のなかで、しかも七〇年安保闘争をひかえ、私達は、この三里塚闘争をこれまでにもまして反対同盟のみの闘いではなく、全国の労働者人民の闘いとしていかなければならぬと考えています。

三里塚闘争は、昨年の二月二十六日、三月十日、そして三月三十一日の公団分室の封鎖をめざす実力闘争のなから飛躍的前進をかちとり、次いで、四月以後の公団あるいは機動隊の暴力的弾圧に対し、断固としたたたかいをおし進め、勝利の展望をきりひらいております。

私達千葉反戦青年委員会は一昨年十一月三日の集会を三里塚現地において開催し、そしてその日から具体的に三里塚闘争を反対同盟とともに闘ってききました。そのことは、この三里塚空港建設のねらいが、明らかにベトナム侵略戦争の激化の情勢の中で、日本の帝国主義者達がそれへの積極的な加担政策をおしすすめる最大拠点としての意義をもっているというふう把握をしたからであります。明らかに三里塚空港は、その完成のあかつきには、巨大な軍事空港として安保体制下日本の私達労働者人民のみならず、アジアの人民を抑圧する巨大な拠点に転化することは必至であります。そういう立場から、私達は今日まで反対同盟とともに全力をあげて闘ってまいりました。

反戦青年委員会は、この三里塚空港粉砕闘争がほんとうに勝利する道は、我々労働者が現地反対同盟と共に、自らの問題として、この空港問題をとらえ、そして闘ったときにはじめて勝利の展望がきりひらかれると確信しております。すでにこのまましたように、こんにち七〇年闘争をひかえ、三里塚闘争は、沖縄闘争とならび、あきらかに一九六九年の日本階級闘争の焦点となっております。私達安保粉砕を語り、安保体制を否定するものにとつて、この三里塚闘争はさけることのできぬ大きな問題であります。

もうすまでもなく安保粉砕闘争とは、七〇年六月における条約上の改変をめぐる闘いとしてだけ実現されるものではなく、現に今日も日本全土で機能しつづけている日米安保の実体そのものを粉砕し、安保強化の一切の政策を破綻においこみ、その総結果として、日米安保同盟を粉砕する闘いであり、あります。一

六八年三月十日、午後五時半、成田市営グラウンド、どこか遠くで「進軍ラッパ」が鳴ったように思えた。

「まさか、軍隊が来ているわけではないし進軍ラッパが聞えて来るはずがない」。日本全国の反戦青年委員会、全学連を立ちあげらせ、五千名の機動隊の弾圧と闘い抜き、夕暮の市営グラウンドで解散集会を開いていた八千名の参加者は、そう思っていた。「あのトンネル街道にいらんだ機動隊は威圧のためなのだ」

だが、それは威圧ではなかった。

「全員検挙」

かの旧日本帝国軍隊の「進軍ラッパ」は機動隊によって本当に鳴らされていたのだ。鉢底の市営グラウンドに雪崩の如く押しよせる機動隊。投網の如く防石ネットが反対同盟の上にあびせられ、一網打尽の乱打。ふつとぶヘルメット。横転

寸前の宣伝車。三才位の子供が機動隊に踏みたおされる。

解散集合の市営グラウンドは、弾圧の修羅場と化した。

六八年三月三十一日

二・二六闘争以来三度目の全国闘争が行われた。四年の完成をめざす公団にとって同時にこの日は、事業認定決定日であるのだ。

成田市営グラウンドは、市当局によれば、今後いかなる催し物にも貸与えないということだ。市当局は、市営グラウンド使用届けに対して、成田市に混乱を与えないため、その届け出を拒否した。しかも警察当局はデモコースを規制し、プラカード、旗竿、すべての携帯を禁止した。

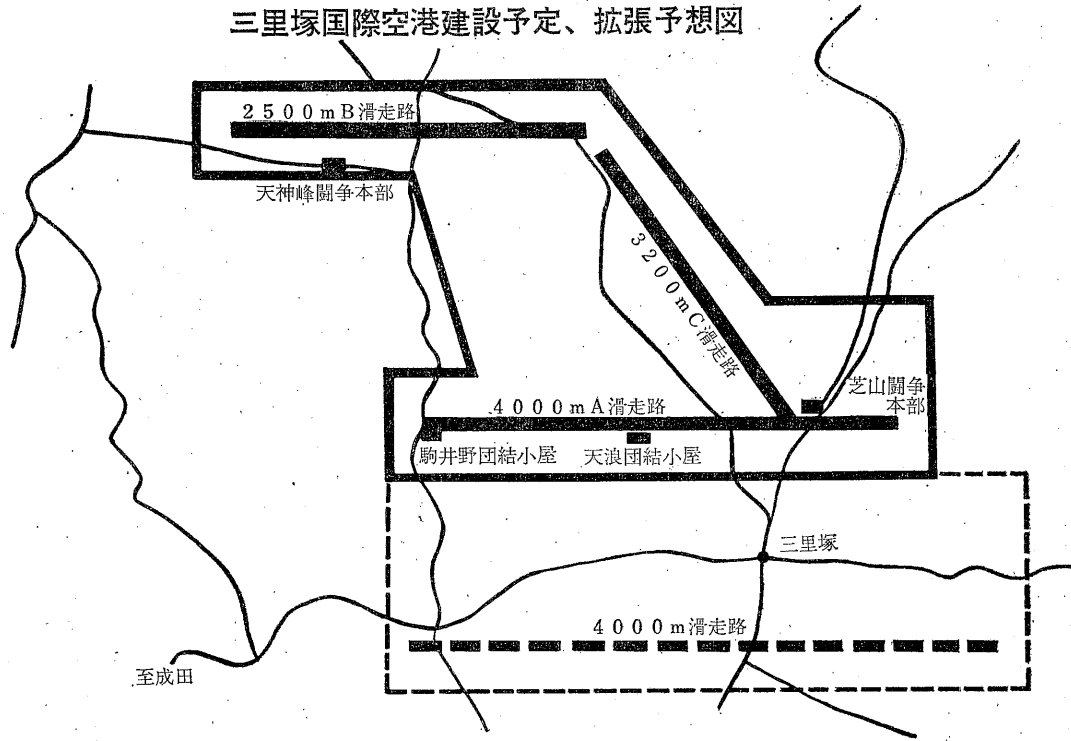
市当局が、この三回の闘争に費した金額は八〇〇万円というのである。年間一億余の収入の中、三回の闘いに八%を使ったのだ。使用内容は、空港公園前にバリケードをつくり、公園の周辺を十重二十重のバラ

方、三里塚空港建設が文字通り日米安保強化の政策であり、強化された安保体制の巨大な柱としてすめられて以上、空港建設粉砕の闘争が、安保粉砕の闘いとたく結合し、その一翼をしめることはいまでもありません。

更に人民の生きる権利の圧殺（土地収奪）も、一片の政府決定と国家権力の暴力がたちあらわれるならば可能なのだとする権力者の論理を三里塚芝山反対同盟の実力闘争がくつがえしつつあるところに、日本の全人民にとっての三里塚闘争の大きな意義があると思います。機動隊の暴力の前には民衆はひれふす以外にないのだとする権力万能論を反対同盟の闘いは、がたがたにくずし去り、人民の実力抵抗がなりよりも根本的な道であることをはっきりと示し続けてまいりました。佐藤政府が今日、七〇年に向けて人民の生活と権利を破壊しつづけ、安保強化の政策を私達に強制せんとしている時、実力による人民の抵抗を貫いている空港粉砕闘争を強化し、防衛し、その教訓を日本の全労働者大衆のものにするには巨大な意義をもっていると考えます。

そしてこのことは、逆に三里塚闘争を真に勝利的に闘いぬくならば、七〇年安保闘争それ自体の勝利の展望をまきりひろげることであるといえます。七〇年安保闘争を目前にひかえ、様々な動きが活発化してきておりますが、しかし、ここからただちに七〇年闘争の高揚を予想するわけにはいきません。なぜならば、それを中心にならざるべき私達労働者階級の部隊が必ずしも七〇年闘争を真にたたかぬ状況にあるといえないからであります。総評傘下においても、民間労組幹部は安保闘争そのものを公然と否定する動きを行い、それに規制されて総評も七〇年闘争を闘う態勢にあるとはいえないからであります。三里塚闘争に圧倒的多くの労働者が参加しえていないのも、そのような状況に規定されていると思えます。

三里塚国際空港建設予定、拡張予想図



規模——(羽田空港の約三倍)	1064ヘクタール	羽田——	2550m
滑走路 A	4000m		1670m
B	3200m		
C	2500m		
年間発着回数	約 28万回		
収奪される農地(敷地内民有地)	726ヘクタール		
敷地内移転戸数	約 250戸		
建設にともなう被害面積(含む騒音地域)	125600ヘクタール		

三里塚と芝山農民約700戸、4000余名の農民は、この空港建設が、農地を収奪し、農村を破壊し、ベトナム向け軍事空港になるとして、反対闘争に立ちあがった。

1966年6月以来、闘いはさらに激しくなろうとしている。

私達は、こうした状況を少くとも一九六九年の三里塚闘争を全力をあげて闘いぬく中から一日も早く脱し、真に圧倒的な万の労働者を三里塚闘争に立ち上らせる状況をつくりださなければならぬと考えないわけにはいきません。全国の労働者諸君、三里塚闘争は、反対同盟のみでなく、労働者階級にとって絶対にさげえない七〇年闘争途上に於ける闘いであることを、千葉県反戦青年委員会は訴えたい。すでに開始された権力の相次ぐ反対同盟青年隊に加えられた弾圧をはねかえし、戦闘的三里塚芝山連合反対同盟を労働者学生一体となった力で防衛し、今春の政府公団の建設強行に対し、実力阻止の闘いに結集しよう。

(一九六九年二月)

線で囲む事なのだ。成田市民はこれを冷笑している。あわてふためいた、あきれほどの警戒ぶりは一体誰のものなのか。

この三月三十一日、予定された成田空港公団の事業認定は運輸省からは行なわれなかった。二月三日の闘いにより、それは不可能となったのだ。

二月二十六日の闘争から三月三十一日までの三回の闘争の中で、全学連や反戦青年委員会の学生、労働者は、反対同盟員宅に民宿した。反対同盟員の全ての家が民宿した人でいっぱいであった。彼等は夜遅くまで、互に語り合い交流を深めた。同盟員は民宿した学生、労働者に朝弁当を渡して闘争に送り出した。そして闘争後、機動隊の弾圧によってびしょ濡れになり、けがをした学生達には、衣服と風呂をわかつて待った。三者はこうして、その結びつきを深めた。

一 農地収奪と戦争への道——三里塚国際空港を粉砕せよ

(1) 三里塚国際空港閣議決定の経過

六三年五月二十一日、政府部内「運輸建設各省の打ち合せ会」は、新空港建設をめぐってもめていた。運輸大臣綾部建太郎は千葉縣市川市の浦安を主張し、建設大臣河野一郎は同県木更津沖を主張した。激増する発着機数に伴って、手狭になった羽田を補助するために設定されたこの計画は建設地を、東京湾内埋立て地に想定していた。両地区の位置する東京湾内は、京浜工業地帯の大企業がひしめきあい、それはすでに飽和状態に達している。過密的に増加する人口、都市公害、工場公害、暴騰する土地。船舶の衝突。加えて幾多の航空制限区域のあるこの地区に建設を予定されたこの空港はせいぜい羽田の補助空港であることを示していた。

「羽田の拡張が不可能だから」当時政府もまたそう考えていたのである。綾部、河野の両者の主張が対立したのは立地上の条件よりも、結びついた大企業の利益上の事であった。両者の間に当該地区住民の被害について一考もなかったことは明白なことである。

だがこの二案は、たちまち机上の仮定として現実性をうちこわされた。同月、浦安周辺漁民は、漁業権を主張、浦安沖埋立に反対して激しい闘争をくりひろげた。

六三年七月三十日、漁民の反対を黙殺して進めようとした政府は、運輸省内での空港関係各省の打ち合せ会で「安保条約第六条に基づき、施設、区域、

里、八街候補地説を出していたものの、反対派農民千五百戸の移転は不可能であるとの意見が続出。政府首脳は各省のふがいなさに、いらだちながらも混乱のまま終了した。

六四年十二月、再び木更津説が登場。若干の検討をされながらも、新国際空港地として不適当と断定され後景にしりぞいた。

六四年十二月十八日、千葉県の発展を空港建設と大企業の進出に想定し、住民無視の県政に、自己の政治生命をかける友納千葉県知事は、浦安、木更津、富里、八街、霞ヶ浦、木更津と三転三転する候補地に動揺し「候補地設定は県に相談の上決定してほしい」むね申し入れを行なった。

六五年二月三日、当然ともいえる住民の抵抗にあい、すでに住民無視の計画が破産を宣告されているにもかかわらず、新国際空港の建設をしゃにむに急ぐ政府はそれを黙殺し、候補地未定のまま、新東京国際空港公団法国会提出を決定。

同年四月三十日、衆院でそれを可決した。同年五月十一日、国会内野党の追求の中で、運輸大臣松浦は答弁中自ら政府の航空行政の混乱を暴露。

同年八月二十七日、公団法を可決したものの、反対闘争と航空行政無定見の為、混乱を重ねる政府関係各省は、なんとか早期建設の打開策を見い出すため、霞ヶ浦にボーリング調査を行なった。

だが期待に反し、その結論は、同地がヘドロ層のため、建設予定地として不適当ということであった。霞ヶ浦住民の反対闘争。同年十一月十五日、燃え広がる富里、八街の反対闘争は、この日県庁に百三十台の耕運機デモ。

六六年一月七日、反対闘争を前に、あせる友納県知事は、運輸省に対して、補償、代替地、騒音などの地元対策樹立を再三要請。

同年二月六日富里、八街地区農民約二千名が県庁抗議闘争。阻止線を破って県庁内座り込みを敢行。警官隊と激突し負傷者多数を出した。同年二月二十八日、激化する反対闘争と混乱する政府案に、友納県知事はついに、空港問題についての「事態放棄」宣言した。

並びに日本国における合衆国軍隊の地位に関する協定」によって定められたブルー14（米軍専用空域）のため、二案は不可能であることを結論づけられた。だが同時にこの「打ち合せ会」は別の重要な結論を生んでいた。「打ち合せ会」は、浦安、木更津に代わって、内陸の富里八街、霞ヶ浦を候補地としてあげ、同時に計画は羽田の補助空港としての建設から、史上最大の新国際空港へと規模を拡大した。

理由は同じ安保条約に基づく、日米両国政府の要望によるものであった。この時以来六六年六月二二日の三里塚への閣議内定時まで、空港問題は形をかえ、当該地区住民との闘争をよび起しながら、その隠された、姿をはっきりさせて来た。

六三年九月、建設予定地に設定された富里、八街地区農民は空港建設反対を叫んで、県知事に大衆的抗議。以後両地区農民の反対闘争は激化の一途をたどり、廃案になるまで抗議行動のみで約百六十回。二万余名の闘いをくんだ。

同様に霞ヶ浦周辺住民は「名産ワカサギが死亡する」「漁民の滅亡」を理由に漁船数百隻による海上デモ、周辺市町村をふくんだ反対闘争に立ちあがった。

六四年になると反対闘争は一段と強まり、富里、八街地区農民は上京して抗議行動を開始した。

六四年十月十五日、各省間で簡単に解決がつくと考えていた政府は、広がる反対闘争に手をやき、同日開かれた空港関係僚僚懇談会はそれまで、富里、八街地区農民は上京して抗議行動を開始した。同年三月、四月、協議会の開催が重ねられ成田地区の検討が進められた。同じ時期、自民党空港推進本部が設置され、数回の懇談会。成田市政へのテコ入れが強化される。

そして六六年六月二二日佐藤内閣は新東京国際空港の建設予定地を成田市三里塚と山武郡芝山町の両地区に決定したのである。決定に際して考慮された事項は国際的な大空港を（富里八街案の二三〇〇ヘクタールに比べ、それはおよそ半分の一〇六二ヘクタールに縮小されたとはいえ、羽田空港の三倍。依然として史上最大の空港案であった。）ブルー14をさける所を、

そして何よりも住民の抵抗が弱く、切り崩しの出来る所を、であった。佐藤内閣にいわせれば、同地区は、およそ三三六ヘクタールの公有地があり、それをテコに建設できるという事であった。

同年七月四日、佐藤内閣は「成田空港案」を閣議で正式に決定し、同日、千葉県議会は同空港建設促進決議案を起立多数で可決した。

かくして一九六三年五月二十一日運輸建設各省の打ち合せ会に端を発した新空港建設案は以来三年有余、型をかえ、関係各住民の闘争と早期完成の政府意向の中で強引に決定されたのであった。

三里塚、芝山決定に至る三年有余のこの過程こそ、今日三里塚国際空港粉砕の闘いが、七〇年安保粉砕、全国的闘いへと爆発し、全土を揺るがす闘いへと発展する性格を決定したのである。佐藤政府の全面的屈服か否か、七〇年安保を前に、今日その闘いはますます鋭くなるうとしている。

だがそもそも、混乱を重ねながらも、強引に空港建設を決定した佐藤政府のねらいはなんであったのか？

補助空港から新国際空港への較換は何を示しているのか？

(2) 補助空港から軍事転用可能な巨大空港建設へ

一九六四年八月二日、ベトナム、トンキン湾海上の米海軍所属艦艇はトンキン湾ぞいの北ベトナム沿岸、石油貯蔵所等々を攻撃していた。一九五四年のジュネーブ協定後、アメリカ帝国主義者の圧制的支配のうちに成立したゴ・ジン・ジエム政権は米軍を支えとして、南ベトナム人民に対する無制限な暴政を行なった。

この前近代的強権的支配は、戦後、フランス支配の下で苦しんできた南ベトナム人民を憤激のルツボにたたきこんだ。フランス帝国主義の自国への支配をディエン・ビエン・フーの陥落によって衰落のあなたに追いこんだベトナム人民は、このアメリカ帝国主義のカイライ政権たるゴ一族に対して、彼等一族の滅亡をもってこたえたのである。

一九六三年十一月一日ゴ政権は倒壊し、ゴ兄弟は殺害された。だがゴ政権への民衆の爆発的反抗の前に、自らゴ自身をも犠牲に供した米帝国主義者の支配は、ゴ自身の殺害によっても安定されなかった。戦後米帝国主義の軍事的支配下での南ベトナム人民への圧制の結果した反乱は、ゴ政権をこえて米帝国主義者の心臓へと突きささっていた。そして南ベトナム人民の全土的戦いと、米帝のカイライ政権たるゴ政権の互解は、世界支配体制をつき崩し、なによりも米帝国主義国内部の矛盾を激化させていく。いかなる理由をつけようと一九六四年八月二日のトンキン湾事件は、明らかに崩壊の危機に直面した米帝国主義者が、自らその打開策を見出すための軍事的攻撃であったのだ。

八月四日第二次トンキン湾事件、同月五日北ベトナム空爆、九月十三日第三次トンキン湾事件、十二月二十九日、韓国の南ベトナム派兵決定、六五年三月九日米海兵隊ダナン上陸とその攻撃はエスカレーションしても、一度崩壊の危機に面した米帝の支配はとどまるところを知らず、最後の、決定的敗北に向っての道を踏みだしていた。そして高揚するアメリカ反戦闘争。それは

宿、立川駅などにおけるその爆発事故、また、タンクローリーの横転によるジェット燃料流出事故は、あふれ出る人口の中で、日本全土、全人民の生活のすみずみまでが一触即発の中にさらされていることを示している。

そして羽田空港の手狭さも、その年間発着機数の四六%を米軍チャーター機が占める所から来たものであった。一九六六年、その数は一三六九機、六七年二二二六機、六八年は一日平均六機、年間二六〇〇機が予想されていた。この米軍チャーター機の増加こそ、羽田を狭くさせ、新しい空港を必要とさせたものであった。しかも軍事力の決定的増大を意図する米軍にとっ

て、新しい空港は羽田如き規模であってはならなかった。その規模は北爆を支える巨大な爆撃機の発着可能な空港でなければならぬ。それこそ新国際空港建設意図であり、従って不転の決意を持って支配階級が決定したものであった。

しかもその後一九六六年四月五日防衛庁より発表された第三次防衛力整備計画は、総額三兆円になんなんとし、質量共に、東洋に並ぶ者なき最強の軍隊として、全軍のミサイル化と空軍の飛躍的強化を目ざしていた。新国際空港は日本支配者が戦後初めてつくり、しかも羽田空港の三倍という巨大な規模を持つものとして、自衛隊の日本帝国主義軍隊への成長と整備をもその目的のうちに含んでいるのである。

3) 日米安保体制強化のねらいと三里塚空港建設計画

すでに、あきらかにしたように、三里塚空港建設は、羽田空港の補助空港としての当初の構想を変え、こんにちでは、日本帝国主義の海外侵略の軍事的、経済的拠点として戦略的巨大大空港建設の意図のもとに強行されんとしている。

すなわち、すでに強権的におしすすめられている日米安保体制の強化堅持の具体的あらわれのひとつが、この三里塚空港建設計画の推進である。こうしておしすすめられている三里塚空港建設計画は、具体的には、

①、核基地沖繩を軸とする全土総基地化の一環であり、同時に日本航空運

米帝の支配を軸とする戦後世界支配体制の崩壊の知らせでもあった。米帝国主義者との提携と、そのカサの下に復興し、なおかつドル通貨体制の存続のもとでのみ存在が可能であった日本帝国主義にとって、この米帝のアジア支配の危機は重大な意味をもった。日本帝国主義者は深刻化するベトナム侵略戦争への加担を否応なくおしすすめたのである。

過剰生産、過剰資本のもとでの構造的不況におちこみ、世界市場への飛躍的前進を意図しながらも、時を同じくして復興した西欧各帝国主義との闘争にそれをばまれ、しかもまた加速度的に増大する労働者大衆の抵抗に、決定的な強権的支配をばまれていた日本帝国主義者は、その飛躍的前進の一切を韓国を足場とする東南アジアへの帝国主義的侵略にかけていたのである。だがそれは米帝の後進国支配体制の安定的支配のもとでのみ可能な事でもあった。南ベトナム人民に象徴される米帝支配に対する闘いの激化はこうした日本支配階級の意図を崩壊の危機にひんせしめたのである。

かくして日本帝国主義者は自らの永続的存続、従って労働者大衆に対する支配を維持し、自らの経済的不況の解決のために、焦眉の課題としてベトナム侵略戦争への加担をなしたのである。

このベトナム侵略戦争への加担による日本帝国主義の積極的な参戦国化は、日本全土をして一挙に侵略的体制の中に投げこますにおかなかった。一九六三年七月三十日「運輸、建設各省の打ち合せ会」が五月二十一日の結論から、一転して「国際的な大空港の建設」に踏み切った理由は実にこうした状況のもとでの事であった。

羽田の補助空港建設では決定的に不十分であり、国際航空界での日本の支配権の拡大は急務であった。そして何によりもベトナム侵略戦争の拡大に伴って増大する米軍戦力は日本に存在する基地の強化、拡大を必要としていた。後方の日本本土こそ米軍にとって安全な基地ではないか、そしてそこにはあらゆる軍事品の補修を可能にする最新鋭の近代設備がある。

今日、板付、伊丹、羽田空港、砂川、横田とあらゆる基地、民間空港が軍用で使用され又、その機能を強化されていることはそれを如実に表わしている。米軍ジェット燃料は、過密ダイヤの国鉄をとって基地に運ばれ、新

輸体制の飛躍的強化と、その強化された航空体制を日米軍事防衛体制へ結合する環である。

②、更に、戦争と侵略の安保体制強化と国際資本間の競争力強化とに耐え抜ける国内産業体制の抜本的整備の中心を担う運輸通信部門の強化の柱である。

われわれは、この空港建設計画そのものにこめられた日本帝国主義、佐藤政府の意図を正しくみぬき、全労働者人民の課題として闘いぬかねばならぬ。

(1) 三里塚空港建設計画

昭和四十一年七月閣議決定された三里塚空港計画プランは

A滑走路 四〇〇〇米一本

B滑走路 二五〇〇米一本

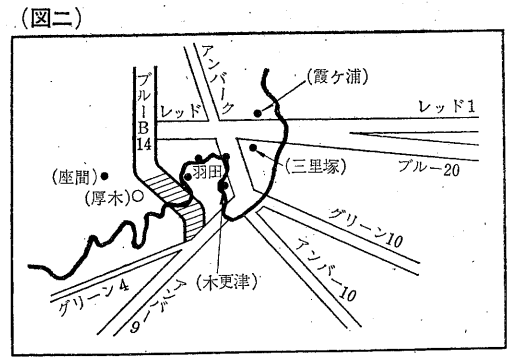
C滑走路 三二〇〇米一本

にターミナル、整備地区、給油施設、他をふくめて、空港敷地一〇六四ヘクタール(図一参照)であり、これに関連して(いわゆる関連事業として)いるもの、空港高速鉄道、空港用排水路としての主要河川の転用拡張、更に、職員用としてのニュータウンの建設等々が計画され、二〇〇〇戸の農家が壊滅的打撃をうけ、SST周航時には、その騒音下で約二万戸の農家が影響下におかれるというものである。

昭和四十三年八月、空港公団は、激化する反対闘争におされて、第一期工事、四〇〇〇米滑走路一本の縮少されたマスタープランを発表したが、その実、彼らの真の計画は、四〇〇〇米滑走路一本の建設の既成事実成立のうえに立って、逆に四一年閣議決定のプランを更に拡張し、四〇〇〇米二本の巨大空港構想を推進するところにある。既に、空港公団総裁は、その就任時「数年後には、現在の倍以上の規模をもつ理想的空港にする」ことを発言、彼らの本心を示している。

新東京国際空港(三里塚空港の政府公式名)が成田市三里塚に決定された位置の問題は、極めて重要である。今日、日本の空は、日米安保条約に基づ

く地位協定によって、治外法権的に米軍体制の中にあり、図二の如き専用空域を関東に於いては支配している。この直接的軍事空域をはずし、かつ首都との直結的位置あると同時に、京業工業地帯、鹿島臨海コンビナート(建設中)九十九里の日本最大の石油基地(予定)を背景にした三里塚地区こそ巨大空港建設予定地としての条件をそなえていたのである。



(注) SST(超音速航空機)は、新型旅客機として、近代科学の粋をあつめた文明の利器としてもはやされているが、一方核を積載して、太平洋を三時間半でアジアにとんでくる超軍用機として開発されんとしている。「米国では、すでにSSTの重爆改造論がでてゐる」(雑誌『軍事研究』四十二年十一月号)

戦後日本帝国主義がはじめた建設する戦略的巨大大空港として、同時に超音速巨大航空機時代の航空、軍事体制に耐えうる空港としての建設計画のもとにすすめられようとしているのである。(注)

一方、羽田空港はベトナムチャーター機の激増により文字どおり軍事兵站空港としての役割を、になっているのである(表一)。更に昭和四十三年、三月中旬根運輸大臣は、三里塚空港の軍事転用問題について「羽田を使用する米軍チャーター機は総合的に使われている。この程度なら日米行政協定によって認めざるを得ない、新国際空港については、米軍がどのような使い方をするかは、上で……」と答弁しており、戦闘機、爆撃機の使用については拒絶するが、米軍チャーター機及び米軍輸送機については当然のこととして通るのである。SSTが巨大な軍用機として飛来することは、すでにのべた通りである。三里塚空港が軍事的目的を遂行するであろうことは、いまや明白である。

(3) 帝国主義的体制整備の柱としての三里塚空港建設

「鉄道の建設は、単純な、自然的な、民主的な、文化的な、文明的な事業のようにみえる。しかし実際には、これらの事業を数千の網の目によって生産手段一般の私的所有と結びつけている資本主義の糸は、この鉄道事業を十億の人々、すなわち植民地と後進国の従属諸国に居住する地上人口の半分以上と、「文明」諸国における資本の賃金奴隷とを、抑圧する道具に転化させたのである。……」(『帝国主義論』「鉄道」を「空港」に変えるならば、以上の言葉は、三里塚空港建設の意味するところを示してあまりある。

すでに明らかのように七〇年安保強化とは、ベトナムに於けるアメリカ帝国主義の危機が、日本にとっての海外進出の条件である東南アジアの帝国主

(2) 戦争と侵略の基地・三里塚空港

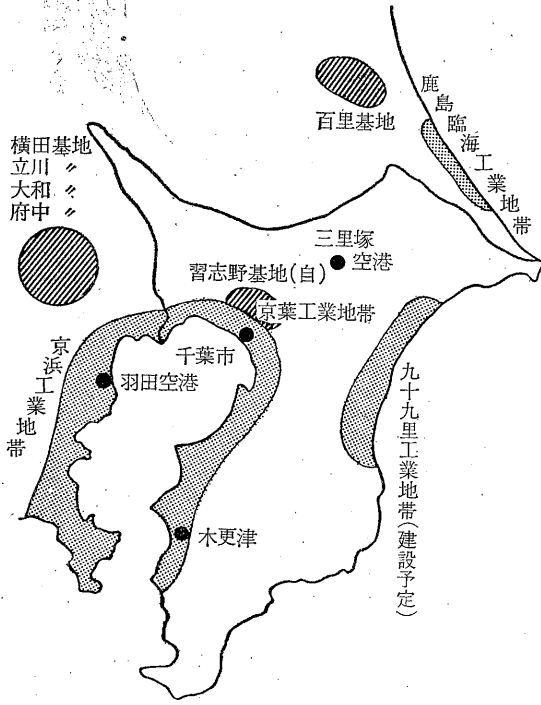
①直接的軍事目的三里塚空港建設が、核基地沖繩を軸とする全土総基地化のなかにしめる位置は、特に重要なものがある。今日、無条件、無制限な核基地、ベトナム発進基地と化している沖繩の軍事戦略的重要性は、日本本土の巨大な工業生産力を背景とした兵器、軍じゅ品が、沖繩を飛び石としてベトナム、東南アジアにとびたつことによって更に高められている。本土沖繩間のこれらの輸送は、民間機の重要な任務となっている。

義的秩序を互解せしめ、一方、国際資本間の競争戦が激化の一途をたどる中で、日米の軍事同盟の新たな質的強化によって、こうした事態をのりきらんとするものである。

そうであるならば、佐藤政府にとっての安保強化の政策は、直接、間接に、日本の全産業体制を、安保強化にむけて、抜本的に再編強化することにむけられなければならない。特に、運輸通信部門の体制的強化は、必須の条件である。すでに、国鉄労働者との対決の中で進められてきた国鉄第三次長期計画は、幹線輸送の飛躍的強化と高速貨物輸送力の増大をもって、米タン、弾薬輸送を項点とする軍事体制との結合を深めており、一方、日本列島を縦断する高速道路網は、同時に軍事戦略的意図をたもって建設計画が強行された。通信部門においても四次にわたる電信電話長期計画がすすめられている。

こうした中で、航空運輸体制は、これまで決定的遅れをとってきた。その結果は、日本の国際航空網にしろるシェア3パーセントという数字の中

(図三)



(表1) 羽田空港利用の米軍チャーター機数

年 度	機 数
1 9 6 4	5 8 3
1 9 6 5	8 4 0
1 9 6 6	1 3 6 9
1 9 6 7	2 2 2 6
1 9 6 8	2 6 0 0 (見込)

の直接的農地収奪(空港予定地内)をはじめとして、関連部門による農地収奪数百戸、破壊的影響下におかれる二千余戸、生活不能の騒音下におかれるもの二万余戸の犠牲を強要しているのが、政府公団の三里塚空港建設計画の全貌である。

(4) 以上の様に、三里塚空港建設の目的は、①日米安保体制強化をめざす直接、間接の軍事防衛力強化と②その基礎ともなる経済体制の一環として日本航空運輸体制の抜本的再編強化である。そのために、二百七十戸余の農家の

(表2) 運輸省管理飛行場と三里塚の比較

空港名	面積 (ヘクタール)	滑走路長 m
稚内	53	1,200
釧路	24	1,200
函館	20	1,200
東京国際 (羽田)	353	2,550 1,670
新潟	211	1,400 1,200
名古屋	330	2,740
八尾	96	1,490 1,200
大阪国際	154	1,820
広島	36	1,200
高松	33	1,200
松山	36	1,200
高知	332	1,200
小倉	61	1,500
大分	17	1,080
大村	33	1,200
宮崎	100	1,500 1,300
熊本	19	1,200
鹿児島	56	1,080
三里塚	1,064	4,000, 2,500 3,200,

一、収奪される農地・破壊される農村

三里塚空港建設がわれわれに鋭く示していることは、それが史上まれにみる巨大な軍事空港だということである。昨年一年間、全国各地に闘われた米軍基地、弾薬庫などに対する闘いは今日、われわれが日、米合わせて一二万ヘクタール総数一八三〇カ所(米軍一四八、自衛隊一六八八)もの軍事基地支配下にあることをはっきりさせた。三里塚空港建設はそうした全土総基地化を進める佐藤内閣の武器である。

と同時に三里塚空港阻止の闘いは、佐藤内閣のこのような政策のもとにあって、農業もまた例外なく犠牲の対象になっていくことを示した。軍事力の強化は、他の体制をそのままにした「単なる軍事強化」ではない。「外交は内政の延長である」ように国内の体制、われわれの生活を編成しなおす。長く資本家的支配の下で犠牲になって来た三里塚と芝山の農民は、土地まで収奪されるにおよんで、佐藤内閣との対決に立った。そして時を同じくして広がった反戦闘争と結びつくことによって、それは全国的闘いとなり、その中軸のひとつとなった。

一体、三里塚と芝山の農民はなぜ反対するのか、どのような犠牲を受けようとしているのか。

一、欺瞞的な空港公団の条件

「機動隊、おめえらは何んで百姓をいじめんのだ。百姓はおめえらに何んか、悪いことしたか、おめえらの中にも百姓出身の者がいるはずだ。親にきいてみる、親の頭をコン棒で撲っていかどうか」空港公団の用地買収の立ち入り査定を実現するため現地に入って来た機動隊員に農民はそう叫ぶ。連日続いた闘争の中で、年五十を越した別の農民は疲れた頭で次のように

いう。「おれは五十にもなって、なんで機動隊と追いかけてこしなくちあんなねえんだ。戦争の時は、歩兵の小隊の長として頑張った。戦争が終った時にゃあ食糧供出に従って働いた。お国のためにゃあつくしたつもりだ。今年には三割がた減産ときまっただんだ」。

政府が候補地を点々と変えて来たのは、ただひとつ日本全土を侵略の基地と化す、その目的を実現したいという執念によるものであった。

一九六七年十月十日未明四千米滑走路予定地の敷力所にクイ打を行うために、二千名の機動隊を動員して以来、空港公団の用地買収と立ち入り査定測量に、連日数百名の武装された機動隊が動員された。およそ交通もまばらな農道の真中に「交通整理」と称して機動隊が並び、反対派農民を検問し、車が汚れているとか、不整備とかの理由をつけて逮捕を強要した。

公団職員の立ち入り抗議する農民にはようしやなく警棒の乱打を加えた。朝九時半から午後六時近くまで、機動隊の厳重な監視下に当該地区で全農民が支配されていたのである。そしてこうして反対派農民の行動を封殺しながら、公団職員、私服警察官の強要による条件派農民への農地売り渡し契約がおしつけられた。

空港公団は、三里塚と芝山に用地を決定した当時、金と物欲に訴えて、農民を立ち退かせようとした。

「三里塚と芝山の農民はうまい事をした。一時に数百万という大金がはいり、マイカーつきの新築の家の中で左うちわの生活だ」。

「見通しの立たない農業など捨てちゃって、すっぱり転業したらどうだね。肉屋でもバーでも開くことは出来るぞ」

「点在している農地より、一カ所に集中している農地の方がいいだろう。そこで今まで出来なかつた多角経営や近代的農業をやれば、反当り収入は比

較にならぬぞ」

かくして、公団の提示した買取条件は次のようなものであった。

「反当の農地買上げ基準価格は三百万までもって行く。農業を続けたい人には、現有地の一、五倍の代替地を与えよう。移転費、移転後の家畜類や農作物の減収については、これを全面的に保障する。仮りにニワトリの卵が移転によって減産したら、何個減ったか計算して、それも保障する。」

だがこの保障ほど白々しいものはない。日本のどこにこんな保障があったらうか、卵の減産量まで計算するとか、牛の乳の量についても同様の措置をとるとか。これまでの事実は提示額はおろか、最低の保障さえ無視されて来たのが実態である。

「これはギマンだ」空港公団の説明員を前にして矢次ぎ早に質問が出たのも当然である。「私がいつているのですから間違いないでございませぬ」。「代金も同意書と一緒に支払います」。「何をいやる。てめえのような下端に何が出来るというんだ。お前さんに約束されたんじや、こつちがもつめえ」

空港公団の下端役人には、本当に何ひとつわかっていないのだ。「左うちわの生活」とか「マイカー」とか、農民は簡単にだまされるといふ考えは根本的に誤まっている。

「左うちわの生活だと、それじゃこれまで俺達の負った借金はどうしてくれるんだ」。農地がつぶされている昨今、新しい農地を手に入れるというのは非常に難しいことである。

一、五倍の代替地、数百万円の代金で新しい農業を。そのような生活保障や代替地は不可能なことなのだ。

だが、こんにちいたれりつくせりの保障を約束したその公団職員は消えてしまった。そしてこの言葉にだまされ農地売渡しの同意をした条件派農民に最終的に提出された保障は次のようなものである。

「反当り買取価格は一〇〇円とする。代替地は、土地不足の折からほぼ三分の一（詳しくは現有地二町五反以上の者に、七反五畝。二町五反以下は五反。一町未満は三反歩）。とする代替地は無償では提供できないので、基準価格を反当り九〇万円とする。新築費や卵の保障は残念ながらできない」。

条件派農民が気がついた時は遅かった。公団の態度は一変した。同意書を書かなくても代金は容易に払われず、ちゅうちよした条件派には私服、機動隊を伴って公団職員が現われ、思っていることを満足にいう事も出来ぬまま強行に調印させられたのである。

しかも条件に屈服し移転した農民を待ち受けていた土地は、赤膚のむき出しになった収穫も満足にあげられない土地であった。

代替地とはいっても登記もしてなく、豚舎に屋根をつけようとするれば不法建築として取締りにあい、買入れた豚も寒さのため死んだ。これでは農民が生きて行けないのは、はっきりしている。「政府には政府の考えがあるのだから、お前達農民は勝手に食って行け」これがその根本だといえる。農民は反政府の態度をうらだし佐藤内閣と対決せざるをえないのだ。

二、去るも地獄残るも地獄の農業政策

政府や関係当局がこれまで農民の事を考えて立案した政策など何ひとつないのだ。眼先きをゴマカス「政策」はあつても、その裏には必ず陥穴が用意されていた。

三里塚の農地の多くは、戦後、開放された旧宮内庁御料地や、山林原野を切りひらいてつくったものである。本家から分家して来た農民や他県からの入植者は数年間、木の根と苦闘して数町歩の畑地を手にした。政府の融資を受けたとはいえ、造ったばかりの農地はおよそ五年から十年の間は赤字つづきの収穫しかあげることが出来ないのだ。政府の融資は、援助から一転して農民の負債となった。この負債返還には十数年かかり現在もなお残っている。また麦、落花生は、よくあがっても反当り二万円の収入しかない。作付を多様にする事によってなんとか収入をあげ、一応の生活水準になって来たのはここ数年である。

しかしそれらもいつまで続くだろうか、一日十二時間を越す激しい労働。収穫された農産物もそのままです事は出来ない。大根は一本一本洗ひスイカは払かなくてはならない。ビニール包装、ラベルはり、袋詰めと、思わぬ経費

がかさむ。乱作、凶作、病気の波及は一瞬にして作物を全滅させる。農産物市場価格は天候や、ちょっとした事件で激しく変わる。

十二時間以上の労働の結果、得ることの出来た農作物は、小型トラックに積まれ市場に向けて出発する時、もう農民の手にはない。

「大根一本五円」「白菜一キロ七円」洗淨し、ビニール袋に入れ完全包装されたそれらは好きなように買い叩かれる。「今日は白菜一キロ四円だよ。これじゃ運賃もでめえよ」。そうなるにつくられた野菜は畑や軒下で腐るまま放置せざるを得なくなる。昨年からは、今年にかけ、そのように放置された農産物は三里塚芝山地区だけでもどれほどの量に達したろうか。

政府はある年にスイカがよければ翌年もスイカを奨励し、キャベツがよければキャベツを、そしてまた養鶏がよければ鶏舎を建てさせて養鶏を、そしてその責任は農民に押しつけて来た。農民の手には赤字が残るのみである。全国各地で進行された農業構造改善事業なるものがある。三里塚では鳴物入りで宣伝された事業、シルクIIコンビナートがあった。

シルクIIコンビナートとは養蚕業の事で茨城、群馬とならんで全国有数の養蚕県であった千葉県に眼をつけて六四年頃から計画したものであった。

「これこそ、農民の生活向上と農村改革の中心」「共同養蚕場での共同作業」などと宣伝されたこの事業は農林省関東農政局と県農林課の後押しで蚕糸局を県の内につくり潮来にある石橋製糸株式会社と提携して始めたものであった。蔬菜類、落花生、麦の作付をやめ畑を桑畑にかえさせ、この事業にしばった。この改善事業に未来の夢をたくした地元民は、県や国の指示に従って、農協を通じてバク大な借金をして資金をつくり、養蚕組合をつくってそれに加盟した。

農業構造改善事業としての補助をうけるためには一二〇町歩以上の桑園がなければならぬ。一二〇町歩にするために畑を次々とつぶし桑畑とした。「地元民の限界は八五町歩だ」という声を無視し、最終面積は一五五町歩の桑畑となった。保有耕地面積二町歩の中、一町八反を桑畑にした人々を含め最低でも二反当の桑畑をつくり、養蚕組合加盟戸数は一八六戸となった。稚蚕共同飼育場、牡蚕共同飼養場、トラクター導入とそのための格納庫と巨大

建築物のために農地がつぶされた。

借金をして資金をつくり、桑畑をつくり、共同飼育場が出来て、事業を開始しようとした四十一年六月、それは突如として中止された。理由は「空港がつくられるから」ということであった。「ここまで来たんだ、県や国が何んといおうと、俺は死んでも養蚕やる」。

総額一億数百万の負債。使いたるものにならなくなった一五五町歩の桑畑。幅数十メートル長さ数百メートルの鉄骨の飼育場。

このような農業構造改善事業があつていいものだろうか。くやし涙にくれた農民が「俺は死んでもやる」と人けのない鉄骨の飼育場を揺さぶつても、まともな農家にもどるには数年を再びかけなくてはならない。いやそれさえ不可能になるうとしている。

今三里塚の畑地の中には使えなくなった桑畑、飼育場、鉄材が風雨にさらされたままになっている。

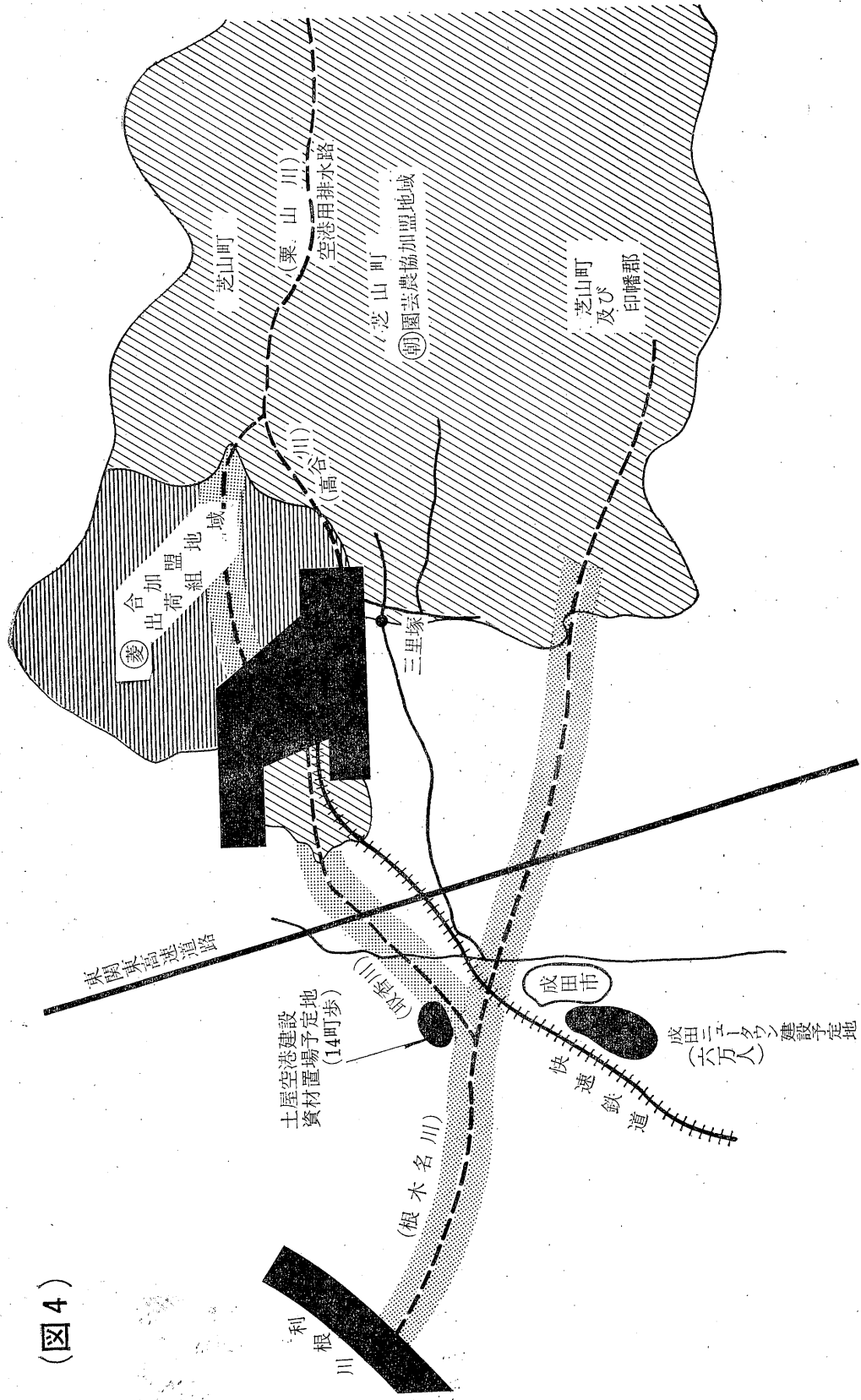
だが空港建設にともなう千葉県政、政府の農業プランの欺瞞性はそれだけではない。

空港予定地三里塚、芝山地区を含む房総半島の農業地帯である北総地域は、千葉県農政の中軸をなして来た。米麦栽培の他に、西瓜、メロン、トマト、キウリ、甘藷、サトイモ、ショウガ、馬鈴薯、などが栽培され、東京市場中心に出荷されている。

朝園芸農協を中心に菱出荷組合、その他幾多の出荷組織も設立されて来た。特に芝山町を中心に成立している朝園芸農協は、戦後、この地区の農民が、国、県、市町村の補助を受けず、自力で創生して来たものである。その傘下にある農家個数約千戸。所有する耕地面積は千八百町歩を越え、広大な地域の農家をその下に結集させた。

米、麦、落花生を抜いた蔬菜類のみの年間売上高は四億数千万円に及び、全国第一の出荷組合である。まさにこの地帯は「東洋のウクライナ」といえる農作地帯であるといえる。

だが、空港建設を中心とした県政のプランは、この広大な地域の田畑を「死せる田畑」にしようとしている。



(図4)

これまで農業用水として使われて来た水は空港用に取りさられ、農業用水路として改修の望まれて来た河川は、今や空港用水、排水路として、広大な耕地を取りつづす拡幅がなされようとしている。

三里塚地区を通る取香川、根名木川は、現在の川幅二メートルから、三メートルのもの八〇メートルから一二〇メートルに拡幅しようとし、三里塚を越え、流域六カ村、数百ヘクタールの田畑を取りつづすようとしている。

芝山地区を流れる栗山川、高谷川は、幅三〇メートルから六〇メートルに拡幅されこれもまた数百ヘクタールの田畑をつぶそうとしている。

この拡幅された河川は、莫大な空港の廃油、汚物を満たす恐るべき水路として、これら農作物地帯を縦断することになろうとしている。しかも、SS Tなど超大型機の離着時に大量にはき出す霧状の排油は空から、これら地域へのほとんどの農地に雨をふらすことになろうとしているのだ。

一方、空港建設に伴うニュータウン計画は外から、これら農地に押しよせ六万人の成田ニュータウン建設、芝山町の工業団地建設計画と相次いで、この農地を取りつづすようとしているのだ。

加えて、半径二〇キロにおよぶ七〇ホーンの騒音は、まさにこの地帯を人の住めない所に変貌させるのである。

条件派農民は空港公団の条件にだまされ移転しようとしている。しかしどこへ移転しようと、半径二〇キロ、七〇ホーンの騒音、廃油のつまった用水路、油の雨。空港用地内二五〇戸、関係各町村二千数百戸の農村を破壊するこの空港建設が、これら農民にもたらす未来が生活の破局であろうことはさげられない事実なのだ。今や千葉県政、空港公団のいう「空港プラス近代農業」が「空港プラス死せる田畑、農村破壊」となってあらわれることは、誰その眼にも明らかな現実である。

三里塚と芝山農民のおかれていまする状況は、去るも地獄、残るも地獄の事態である。

農民にとって闘いのみが唯一生活を守る道なのだ。

三、日本帝国主義と農村——日本農村の危機の上に立つ三里塚闘争

以上にみる如く、三里塚と芝山の農民がその存在を危くさせられているのは事実である。このような事態は多少の差はあっても今日日本農民のおかれている状態である。茨城県鹿島臨海工業地帯建設のために八千ヘクタールの農地がつぶされ、群馬県沼田、八ッ場ダム建設では五千戸の農家が水没しようとしている。そして計画の進む千葉県九十九里浜工業地帯については四万ヘクタールもの農地が収奪されようとしているのだ。しかも、これらつぶされる農地の買取価格は以当り一九万から三〇万円なのだ。

一体なぜ農民はこのように犠牲をうけ、農業政策は絶えず変貌するのか。それは今も変わらず「農民切り捨て」の政策が行なわれているからである。

重化学工業を中心とし、資本、商品輸出市場の獲得をめざす日本帝国主義は、その争奪戦に勝つるのこるために、全ての政策においてその育成と、海外進出をいわば至上の命令としている。

戦後荒廃の中で必要食糧を輸入に頼った日本経済は、農産物の生産高をあげるため、米作奨励をはじめ、様々な農業政策をおこなった。資本の蓄積、設備投資、海外市場獲得をめざし、財政の大半をそれにつぎこむことを希望して来た政府にとって必要不可欠の事であったからだ。六〇年代にはいると、その生産高は国内の需要糧を満たす所まで回復した。

だが、この回復は、後進国の輸出入関係を工業生品の輸出という構造を持って成立させて来た政府にとって、回復は回復で逆に国内の農業生産物買上げに対する財政負担を重くして来たのである。一九六〇年以後、米生産高は増加の一途をたどり、政府持ち米のだぶつきを生じさせ、食糧管理会計は赤字続きとなり、それは異積的傾向をはっきりと示して来た。(特別会計の六八年までの赤字は二千八百億円) しかも折から始まった深刻な不況と海外市場獲得の急務、加えてベトナム侵略戦争の激化にみられる東南アジア一帯の動揺は、こうした異積的赤字の解消を急務としたのである。生産者米価は圧

えられ、米作からの転作、早場米奨励金の打ち切り、加えて総合予算主義が採用される。

昨年生産者米価をめぐって農民と政府の対立は深刻な政治問題化された。(一)昨年の米価アップが九・二%であったのに比較し、昨年当五・五%を圧えられ、農民のわずかな要求も粉碎された。

農業は支配階級にとって、その帝国主義的な政策に従属して変貌させるものであり、そのためには米作を奨励したり切り捨てたりしてもいいものなのである。

前述した米価上昇の抑制にしても総合予算主義の中で、予め決定づけられたものであり、むしろ大衆の不满を農民に向けることによって米価を圧え、農業を圧迫し、都市の進出の中で、農村がつぶれる事を「安価な労働力の社会的生産過程」などとしているしまつである。

帝国主義にとって、農業問題は基本的に帝国主義的植民地政策の問題であった。資本家達は己が海外での資本市場、勢力圏の獲得によって、食糧原料問題を解決し、それをテコに本国の農業問題に対処して来たのである。だが当然にも、そのような政策は日本農民にとって、重大な危機を結果するにちがいないのだ。

帝国主義的農業政策による農民へのしわ寄せは今日進行し、いまや日本の中堅農家さえも深刻に犯しはじめている。

三里塚と芝山のみならず今日、様々な形で農地収奪をうけている農民は、そのほとんどが中心的農家である。三里塚の農民の平均農地は二町歩を越え、芝山農民についてもまた二町歩近い農地を有している。

空港問題に端を発したとはいえ、今日三里塚芝山農民の闘いが、全国農民の注視を集め、全国的闘いへと発展する性格は、それが空港問題を越えて、農民の受けている存亡の危機をあます所なく描きだしたからである。



一、反対同盟結成と条件二派の登場

|| 一九六六年六月から一九六七年八月 ||

一九六六年六月二八日成田市立遠山中学校は空港反対同盟結成のために集まった千数百名の農民で埋めつくされていた。会場は集まった農民の空港反対の熱気であふれていた。後述する闘争日誌にもみられるように、結成大会後七月十日に直ちに「総決起集会」が開催され、各部落では「空港反対」の看板がつくられた。

芝山町議会、成田市議会さえも「空港撤回」の決議をし、地方自治体を含んだ全住民的闘争の様相さえ示していた。闘争の燃えひろがりの早さ、同盟の結成などは富里八街闘争に影響されたものとはいえ、ともかく、空港をつくらればそれまでの農村が一変することは誰れにも解っていたからである。部落を越えての交流はまた反対同盟に新鮮な息吹きをあたえた。

ある農民は闘争初期を述懐し次のようにいう「富里、八街よりすごかった。あれだけの勢いでは、おそらく早期廃案だと思ったな」。組織の拡大、一坪登記(日誌内説明参照)広報活動、自治体闘争等々など、ある面での言葉に象徴される気持を込めて反対同盟の農民は闘った。「公団職員が来ようと、崩れなげりや、勝負ありだ」。

「犬と公団お断り」。「金は一時、土地は末代」という看板もそれを表わしている。

一坪登記は半年間で千三百名を越え、空港公団のアンケート焼きすてから、決起大会と実に勢力的に闘ったといえる。

空港公団はこの力との正面衝突をさけていた。「事を荒だてたくない」「説得すれば崩れるんだ」という二つの意図が働いていたのである。この時期は

いわば両者の組織拡大を意図した闘争であった。反対同盟は已がどのような敵を相手としているのか、完全には感知していなかったといえる。

金、酒、みやげ物。空港公団は陰然たる切り崩しを行ない大量の金をつかって、芝山町議団を温泉によび、町議会決定をくつがえさせた。部落対策協議会、地権者会議などの条件派を露足させ、買収の足がかりをつくった。県知事、運輸大臣、空港公団総裁が来成し、政府側の宣伝を強化した。

「早期廃案は簡単には行かないな」。敵の攻撃は執拗であり本物であった。反対同盟のパトロールの実施。公団職員の適発がおこなわれた。敵は芝山町議会のリコール成立に対する実施の引きのばしをもってこたえ、買収価格提示の中で動揺をまいった。闘いに対する私服警官のおどかし、しかも空港公団は政府の力による宣伝を強化していた。

「一発ぶつくらさなければ、しょうがあんめえよ。県庁や公団に対して、はつきり抗議しなけりやあだめだべえ」。

闘争は反対同盟の強烈な政治的表現を必要としていたのである。「これだけの住民が反対すれば政府が崩れる」と思っていた事が通らないのである。

農民の怒りは六七年六月二六日の大橋運輸相の来成に対して京成成田駅前での抗議行動、八月十五日千葉県庁への深夜にわたる坐り込み抗議行動となって爆発した。この時期の末にあたるこの二つの闘争は三里塚芝山農民の闘いの変化の開始に相当していた。大衆的な実力阻止の闘いへ。

「簡単に説得出来る」と考えていた空港公団の思惑も基本的な失敗に終わった。闘いの発展は、同盟の昼夜をわかつた活動によるとはいえ、農民のおかれています現在の位置のしからしむるものであった。

闘いは反対同盟結成からの一年有余にわたるこの時期の中で、両者の密集した押し合いを経ての、実力阻止闘争に向って進行しようとして来たのだといえる。だが反対同盟は敵側の攻撃の厳しさを未だ知らず、空港公団は農民の闘争の社会的性格と力の根源を感知してはいなかった。

闘争日誌

だが芝山町選挙管理委員会「委員病欠」を理由にこれを翌年二月まで放置した。

三月六日 条件派、空港対策地権者が発足。

三月六日 条件二派と公団側のあっせん会が数回にわたってひらかれ、買収工作が進められた。

五月十九日 成田空港公団総裁初めて成田へ来る。

六月十四日 東京地裁において空港工事認可取り消し裁判の第一回口頭弁論。

六月二六日 大橋運輸大臣の来成。

「大臣の来成という力」によって空港建設を促進しようとして成田へ来た大橋大臣に対し、反対同盟農民はこれを京成成田駅頭においてとらえ支援団体を兼ね成田署警官の妨害をけつて駅構内にとじこめ、一方、成田市役所を完全に包囲し数時間余にわたって大橋に対する大衆的抗議闘争を行なった。

八月十五日 千葉市本町公園でひらかれた「新国際空港粉砕、強制測量実力阻止平和集会」に参加した反対同盟、支援団体の員約四千名は、近く予定される外郭測量の公示中止を要求して県庁に対して抗議行動を行なった。

県庁内に坐り込んだ闘争に対して県警機動隊は、午後六時これを包囲し、七時よりひき抜きの弾圧を開始した。一旦引き抜かれた反対同盟は羽衣公園から再びとつてかえし、坐り込みを続行した。共産党をはじめとする支援団体が目的は達した坐り込みをとうとうという中で「強制クイ打ちを中止しない場合は徹夜でこれを続行する」方針を確認し、全員が十時半まで坐り込みを敢行。その二十名は、翌日まで闘争を続行した。

同日この闘いに反対同盟宅の小、中学生は、少年行動隊を編成し、まさに家ぐるみの闘争となった。

六六年六月二八日 地元清水の遠山中学校で反対同盟を結成、地元農民のほとんど全てを集め参加者約千五百。

七月十日 遠山中学校講堂において新国際空港建設閣議決定粉砕決起大会を開催。(これより先の七月四日佐藤内閣は閣議決定)

七月二〇日 山武郡芝山町議会は寺内町長を先頭に空港建設反対を決議した。反対同盟は、公団の買収と強制収用を阻止するために(一坪登記運動を開始。一坪登記運動とは、反対同盟員の土地一坪を全国各地の支援団体個人に〇〇円で売ることにより、土地所有者の分散をはかる。これによって公団側の買収、土地収用法の適用も困難になる)

各部落分担による看板、スローガン作製がおこなわれ、用地内一帯にそれがたてられた。

九月六日 空港公団は畑地買収価格について、一反歩当り六〇万〜一〇万を内定。

親戚、知人を含め空港公団側の切り崩しが強まる。

条件派の空港問題部落対策協議会が発足。

九月三〇日 空港公団の補償、代替地等々についての第一回説明会。

十月二日 成田市営グラウンドで空港建設反対の総決起集会

十二月二七日 芝山町議会は「空港建設反対」の決議を白紙還元した。

過ぐる七月十日の反対同盟の決起集会において又七月二十日の町議会において、先頭に立つて反対した寺内町長は自らその決議を破棄した。公団や県知事の説得、金、酒におどらされた町議員十六名は、十二月中旬に茨城県袋田温泉に行き、そこで密会をもち、秘かに白紙還元についての意向をかためて来たのである。

二七日 ひらかれた町議会は、百二十名の武装警官を動員し、反対派議員三名の発言を封じ右の還元を実現した。

この頃、一坪登記者数は千三百余となった。

一九六七年一月九日 「白紙還元派町議員」に対するリコール運動が開始された。賛同者署名は四日間で十六名全員に対して各々三千名を越え、法定規準数を突破した。

一、実力阻止の闘いへ——全学連、反戦青年委員会との連帯と日本共産党の闘争妨害

〓六七年九月から六七年末〓

この期間の闘争は機動隊との対決を通じ全学連、反戦青年委員会との連帯を経て共産党と決別する苦難の期間である。

八月十五日の闘争は反対同盟のみならずから身体をはつきり敵権力と対決することが必要であることを示していた。公団の買収に対してはこれを口頭で抗議し、自治体を通じての抗議を行ない、知事、公団総裁への要請も行った。地元農民の反対の声は充分すぎる位示したのである。それでも敵側が、それを次々と崩ししめあげてくるならば、その攻撃を打ち砕かねばならない。農民の怒りと、「富里、八街の農民が勝った」という実績が闘争への確信を与え、組織強化へと向った。だがこれは「実力阻止闘争」を否定する者との思想的、組織的決別を意味していた。

強制外郭測量が云々され、この年の秋すでに空港公団の弾圧と対決する闘いが待ちかまえていることは明白であった。

九月十五日の敬老の日、反対同盟老人行動隊は、闘争の演習日としてこれをむかえた。

「これだけやって、今度は向う測は、強制測量やるっていうんだから、闘う以外あんめえよ。公団をおっぺさなけりあ、勝てっこねえんだ」。公団側が農民の意向を無視して、実力行使を行こなうならば、これを阻止するため「実力阻止」で闘うことは勝利に向けて必要なことである。

「実力阻止」でなく「生産点」での闘争をやれ。よくそのようにいった人達がいいた。しかし農民の生産点での闘争なるものがあるとすれば、農民を収

奪するために、警察を使って追い出そうとする権力者と闘うことである。それは敵を追いださなければ敗北に帰することは自明のことである。

反対同盟は変りつつあった。「政府、自民党あるいは官庁の役人達は信用できない。奴等は権力者だ。自分の土地は自分で守らなくてはならない。そのどこが間違っているのか」

十月八日の全学連と反戦青年委員会の第一次羽田闘争は反対同盟内に深い共感を呼んだ。

空港公団は建設に向けての実績をつみ重ね、その方面からも地元反対同盟を破壊するためアメに対する「ムチ」を行って来た。

なお十一、三闘争を準備する過程で、千葉県反戦青年委員会中野洋議長を本部長とする反戦青年委員会現地闘争本部が確立された。

闘争日誌

六七年九月十五日 予想される空港公団の強制測量に対して、この敬老の日、反対同盟は老人行動隊を中心に「演習」を実施した。

同年十月十日 十日午前二時、今朝空港公団は千葉県警機動隊二千名をひき入れて測量実施するとの知らせが入った。反対同盟の動員指令、戦術の打ち合わせが行こなわれ、一方、パトロール隊の警戒体制が厳重に組織された。

午前三時半、機動隊約二〇〇名が成田市十余三部落に現われ、ここを守っていた反対同盟八十名と衝突。同盟はスクラム、坐り込みを持って阻止線を作った。四時過、機動隊は引き抜きに移り、反対同盟に対して、なぐる、けるの暴行を加えた。

午前五時、別部隊千数百名の機動隊は同盟が十余三の衝突に集中している間、清水より駒井野方面に空港公団職員をひきつけて侵入した。二百名の青年同盟を中心とする反対同盟は、機動隊と衝突、スクラムによる阻止闘争から坐り込みにはいった。

機動隊の引き抜きと強暴な暴力に対して、抜かれても、すぐ坐り込みに

加わる反対同盟は、この闘争に参加したすべての者に再び、三び「スクラムに参加しろ」「坐り込みを行え」を要請した。

だがこの日闘争の「支援」に来ていた百数十名の共産党、民青はこの呼びかけを無視し、坐り込み、スクラムを解いて、畑地の中で歌を唱いはじめた。「反対同盟のみなさん、敵の挑発にのるのはやめましょう。坐り込みは道公法違反で逮捕されます。団結が必要です」同盟の中から、闘争放棄と敵前での裏切りに対してバ声がとんだ。

「闘うのが恐えなら、帰っちゃえ」「道公法違反とはなんだ」。機動隊は同盟員をけちらし二名を逮捕。婦人、老人に重傷一名負傷数名が出た。

機動隊に守もられた公団は第一、第二標点の杭打ちを敢行。六時、さらに別の機動隊六〇〇名は、三里塚十字路から第六標点に向って攻撃をかけた。これに立ち向った老人行動隊はウチワタイコを打って坐り込み、阻止線をはったが、多勢に無勢、隊に第六標点への杭打ちを許してしまった。

二千名の機動隊を使った弾圧によるこの攻撃は、国家権力の空港建設にかけた強暴な意図をはっきりさせた。身体をはった実力阻止闘争が必要なのは、誰れの眼にも、はっきりしていた。「俺達の闘うのは当然の権利だ」再びそのような呼びびが反対同盟員の中にひろがった。

だが、「日本共産党は？」彼等の「闘争」はニセモノだ。闘うことなく党勢拡張を意図する団結は闘う者にとって無縁だ。

十日の闘争を通じ、共産党の破綻的な行為に対する批判は、弾効の怒りとなっていた。この日、千葉県反戦青年委、全学連の十数名が闘争に加わった。逮捕者二名、重傷一名負傷者数十名。

十月十二日 打ち込まれたクイは、予定の正確な位置から大きくはずれていたが、何者かによって抜き捨てられた。この日県警は、再び二百名の機動隊を動入、弾圧を行かない、負傷者数名。

この日公団はコンクリートミキサー車を動員し、それぞれのクイを一トンのコンクリートを使って固めた。阻止闘争で、麻生つるさん重傷。

十月十七日

残された標点へのクイ打ちを行こなうという知らせが入り、反対同盟は、第一標点近くの山の中に、数百名が未明より待機して警戒体制をひいた。しかし反対同盟のすばい闘争に警戒して、この日空港公団はクイ打ちを中止した。

この頃から改めて、羽田闘争を闘った全学連や反戦青年委員会への関心と共感が深まる。

「三派全学連のように闘わなくちゃ、しょうがあんめえ。」

「三派を呼ぶってよ、共闘出来るべ、共産党は全学連排外を宣伝

闘争の方針、全学連、反戦青年委員会との共闘をめぐって日本共産党との間で大論争、組織的闘争が爆発。

折から千葉県反戦青年委員会を中心に全学連や青年労働者は来る十一月三日、三里塚闘争の重大時に当たって「三里塚空港粉砕、ベトナム反戦総決起集会」の開催を現地に申し込んでいた。

共産党のいう全学連や反戦青年委への見解は次のようなものである。

「彼等は、トロツキストといわれて暴力集団で、マスコミにとりあげられるのも、彼等が闘争破壊の分裂主義者だからだ」。

「羽田闘争の時、右翼から五〇〇万円もらって突撃をくりかえし、機動隊の挑発を招ねいた」「三派や反戦青年委など共闘すれば、角材でなくられて大ケガをするし、民宿させれば、家庭は破壊される」。

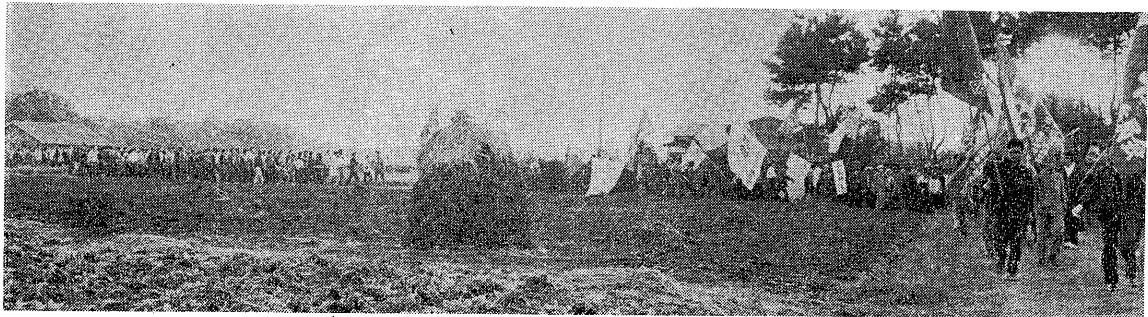
十一月三日に至る半月間、共産党、民青は陰に陽に、反対同盟員の行動にワクをもうけようとした。

だがこのしめつけに対して同盟は闘争を開始した。「この支配はどこか間違っているのだ」

「どこが？」

十月十日 未明、彼等が、機動隊を前に逃げ去ったあの破綻な行為は、日本共産党の本質であった。十月八日羽田で三派が撲ぐられ血を流している時、彼等は多摩湖畔で「赤旗まつり」をやっていた。疑惑は侵透していた。

反対同盟の中で、親同盟と共に、全学連・反戦との共闘に努力した青年



11. 3 闘争、空港用地内をはじめの縦断デモを行なう反戦青年委員と全学連。

同盟は十一月三日の三者共闘実現に向けて精力的にとりくんだ。それは同盟が再生するための努力でもあった。

共産党の妨害をけて、十一、三闘争に向け、用地内の立木、電柱にステッカーをはり、集会参加の呼びかけを行なった。千葉県反戦青年委のメンバーは、羽田の事実を伝え、三里塚闘争に対する自己の見解を訴えた。

共産党は青年同盟のステッカーを破ぶりさり、又はその上に「暴力集団トロツキストを入れるな」のステッカーをはった。

青同のオルグに対する逆オルグが組織され、全同盟の各戸に、十一、三集会不参加の要請をおこなった。

十一月三日 日本共産党は、早朝、反対同盟幹部宅に押しかけ、討論づくめで集会参加の足止めを行かない、各戸に向けてオルグを派遣していた。

だが集会は、妨害に会いながらも、いやむしる妨害があった故に、同盟員のかつてない注目の中で実現された。全学連と反戦青年委員会は、はじめて反対同盟の前に、その大衆的登場を実現したのである。

この日のデモは、闘争開始来、はじめて用地内八キロの縦断デモを貫徹。このデモは集会がそうであったよう

に、来るべき激突に向けて同盟内外に「闘いが戦闘の段階に入った」とことを知らせることを意味していた。闘争は単に「農地を売らない」と頑張ることではなかった。デモを、大衆的抗議行動を必要としていたのである。「悪夢の如き一カ月」反対同盟の幹部は、この後十二月十五日の連合反対同盟実行委員会（同盟最高決定機関）において全員一致で「共産党への弾効と絶縁」を決定する期間をそう呼んでいる。

共産党はいう

「十一月三日の集会は、反対同盟一部幹部が勝手に決めたものであり、同盟の民主的運営を破壊した。」「彼等は共産党員をなぐった」そしてこうもいう「あんた方、農民は政治の事はよくわからないから無責任な事をいうが、もつと学ばなくてははいかん」

毎週金曜日に行こなわれる同盟の金曜集会は、近くの地区の共産党細胞が、組織だったヤジと、拍手で、議事を妨害した。

「ちば民報」「共産党成田地区委員会機会紙」「遠山新聞」各種の共産党の機関紙は反トロロキヤン・ペーンと反幹部の宣伝をおこなった。十一月三日を前後して、反対同盟幹部を説得しようとして出来なかった彼等は、同盟員と同盟幹部の離反を計画したのである。

一カ月余、同盟は内部を混乱させられ、機能は停滞した。

十二月、共産党のチラシは狂っていた。「反対同盟委員長戸村一作、副委員長石橋政次は、運輸大臣との間に密約をとりかわし、同盟にかくして用地売りわたしをきめて来た。」

「副委員長瀬利誠、同石橋政次、行動隊長内田寛一の三氏は、すでに条件派になるため代替地を買った。」

十二月十五日 午後一時からひらかれた三里塚芝山連合委員会は、日本共産党の全面的自己批判なしには一切共闘しないことを決定。

十二月十八日 午前五時、用地買収のため駒井野に侵入した公団職員をパトロール隊が発見し、反対同盟三〇〇名で撃退。

十二月二十二日 空港公団のクイを作製した地元芝山町の冬木材木店に三〇〇名で抗議。

直面する普遍的闘いとしてそれを位置づけたのである。

三回の闘いは、反対同盟にとって、はじめて国家権力と正面衝突した闘いであった。国家権力の強暴な弾圧は、この闘いの厳しさを知らせていた。従来の「なんとなかなんではないか」というどこかある期待はミジンもなく消しとんだ。だがこの三回の闘争を通じて、後に来る四月〜七月の現地での実力阻止闘争を貫徹する力をつけたといえる。

空港公団にとつても逆のいみで、又同様であった。「説得でき得る」と考えた農民は説得されず、公団を打倒するものとして彼等に迫った。

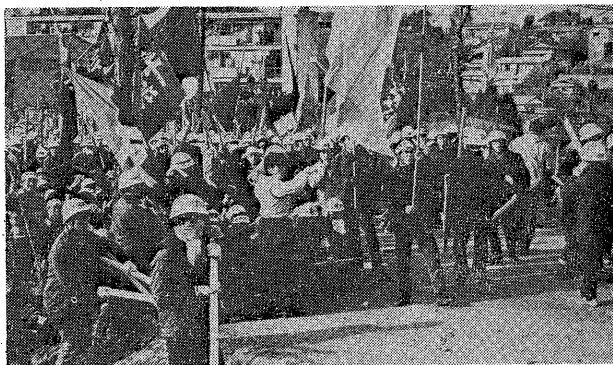
条件二派をうみ、それを手がかりに買収を拡大しようとした彼等の計画も阻止されて来た。一月から三月、買収と測量を行かない事業認定の確立を實現しようとしたもくろみは、爆発した全国的闘いの中で粉碎された。かくしてこの闘いを通じ、四月以後現地での空港公団との激しい攻防戦に入る。

闘争日誌

二月十四日 一年間余引きのばされていたリコールによる芝山町議員の選挙が行こなわれ、瀬利、内田氏をはじめとする反対同盟推せん立候補者九名は全員当選。勢力分布は九対十一となる。

二月二十六日 早朝から成田市菅グランドの周囲は、一万名近い成田市民で埋っていた。

この日、三里塚芝山連合反対同盟、砂川基地拡張反対同盟、全学連秋山勝行の三者共催による「三里塚国際空港粉砕ボーリング実力阻止総決起集会」が開



2.26闘争で成田空港公団に抗議する反戦青年委員と全学連。

三、三里塚芝山農民の闘いから全国的闘争へ

一九六八年二月二十六日〜三月三十一日

三里塚闘争のおかれていた客観的政治的状況が、この闘争をして全国的政治闘争にならしめたとはいえ、農民が現支配体制の秩序を揺がす状況に自ら登場したということ、この事は何をいっても高く評価しなくてはならない。そして全学連と反戦青年委員会を中心とする全日本の労働者階級は己が包みこみ、共闘すべき部隊としてこの農民と固く連帯しなくてはならないのだ。

「三里塚と芝山の農民は闘争の犠牲をエサにマスコミを騒がせ、満足している」。このような言葉を日本共産党外の何人かの部分からもきいた。

三里塚と芝山の農民はマスコミに取りあげられようと二月二十六日から始まる三回の成田空港公団分室に対する闘争に立ちあがったのではない。

彼等は、手をかえ品をかえ、結局のところ農民の生命を奪おうとする佐藤内閣と闘うために立ちあがったのである。それは圧制に敷きだかれて来た者の強裂な政治的表現であった。全学連と反戦青年委員会こそ、唯一「気持を通じ合える部隊」として機動隊の弾圧下での苦闘を共にしたのである。

二月二十六日の闘いは、三里塚、芝山農民の闘いから全国的闘いへと発展させた。第一次羽田、第二次羽田、佐世保の闘いと激動の序幕となったこれら闘いは日本の全ての人々に支配階級の攻撃の性格を浮きぼりにし、それを通じて三里塚空港建設の恐るべき意図を鮮明にさせた。

十一月三日、十二月十五日の二つの期間を経た反対同盟は、この闘いが実力阻止の闘いであることについて確認していたのである。

二者の力は、結びつくことによって「民間空港だ」という支配者のまやかしをやぶった。同時に、全国化する三里塚、芝山農民の闘いは、今日農民の

らかれた。全学連一五〇〇、反対同盟一〇〇〇、反戦青年委その他五〇〇名。

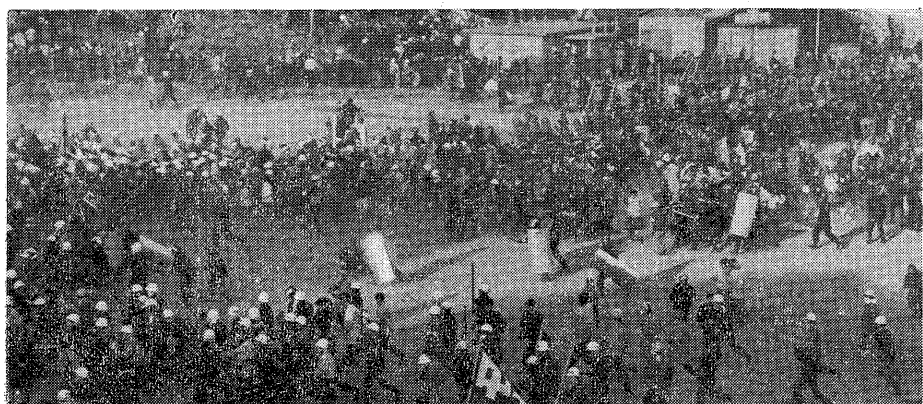
全国の異常な注視の中でひらかれたこの日の闘いは、空港公団のしいた装甲車の壁に肉迫し、公団に対し大打撃を与えた。（負傷者）戸村氏、池間君をはじめ一五五名。（逮捕者数）数十名

この二月二十六日を先立つ二〇日前頃、全学連現地闘争本部が開設され、天神峰本部、駒井野団結小屋を中心に活動を開始した。

三月十日 二、二六を出発点とした三里塚闘争は、佐世保につく大闘争として広がり各職場、学園の中に浸透していった。

全国反戦青年委員会、三里塚芝山連合反対同盟主催の「三里塚国際空港粉砕、ベトナム反戦総決起集会」が開催され、八〇〇〇余名の参加者にふくれあがった。警備の機動隊五〇〇〇名。

強化された弾圧はTBSテレビの「成田二四時」の放映を禁止し、婦人行動隊をのせたのマイクロボスは、検問にかかって、責任者は解雇、配転をうけた。



3.10闘争の解散集会における機動隊の弾圧。

又早朝から、各要所にひかれた検問は、会場設営用器材をのせた車をとらえ、成田署内に長時間にわたって勾留、闘争は国家権力との全面的対決となった。

午後三時、反対同盟、反戦青年委、全学連の学生は、成田空港分団に対する「実力闘争」を開始した。装甲車、有針鉄線のバリケードなど佐世保闘争と同様の弾圧体制をしいた権力は、催涙弾、放水を持って弾圧し、坐りこんだ反戦青年委を警棒でメッタ打ちした。千葉、宮城、群馬、大阪各反戦から重傷者が続出し、意識不明、失明の恐れのあるもの十数名。病院にかつぎこまれたものは数百名にのぼった。

しかも、この日、あらん限りの暴力をふるった機動隊は、午後五時半、解散集会中の参加者全員を襲い、無抵抗、無防備のデモ隊に対して、これを完全包囲し、警棒の乱打を加えた。この弾圧による重傷者数十名、逮捕百数十名。まさにこの日の弾圧は、三里塚空港建設にかけた支配者の野望をはっきりしめた。

(負傷者数) 重傷者三五名、(意識不明三名、骨折裂傷などが目立つ)。病院で手当てを受けた者及び入院者三百数十名(逮捕者) 学生一九八名、反戦青年委、約三十名、反対同盟重傷者十八名

三月二十日 三里塚第一公園で千葉県共闘会議と反対同盟の総決起集会。二〇〇〇名の参加者は、三里塚小学校横までデモ行進

三月三十一日 空港公団



2.26~3.31の三回の闘争で民宿した学生達。彼等は弁当を受けとり闘争へ出発していた。反対同盟との交流は深まった。

は、この日を「事業認定日」と決めていた。彼等にしてみれば遅れている計画の進行をせがむでもこの日に実現したいと考えていた。

三十一日、三度目の全国的大集会在三里塚第二公園で開催された。空港公団、市当局、千葉県警は成田市営グラウンドをはじめとする公団分室にかいすべての集会場の貸与を禁止していた。デモ隊は第二公園から空港公団に向っての十二キロのデモコースを全員行進し、公団分室へ向っての闘争をおこなった。とみに強化される弾圧は野蠻さをまし、デモ隊の分断をはかって、田畑の中まで追いかけて逮捕、撲打をおこなった。事業認定は成立せず、この三回の闘争の中で、全学連や反戦青年委員会の労働者は、同盟員宅に宿泊し、交流と連帯が強化された。放水車の催涙液、ガス弾に汚れた学生の衣服は同盟のさし入れによって救援された。

(負傷者) 三、一〇とほぼ同数。(逮捕者) 二三五名。

四、立ち入り測量阻止の闘い—激しく続いた現地での闘争

四月一九日と八月二四日

「六八年六月。夏の太陽はもう昇り切っている。スイカ畑もメロン畑も、黒土までもが、じっとりと汗ばんでいるようだ。時折り通る車ももうもうたる砂塵をあげて行く。午前九時、天神峰闘争本部、「もう公団の奴等、成田を出発するらしいぞ。公団職員機動隊を含くめて三百だと。今日は清水だけじゃあめんえ。十人三からと天浪からはいってくべえ」「どうするや、動員かけつか」「ちよつと待て」

天神峰闘争本部への日直の同盟員の出入りが激しくなり、常駐の学生が連絡に走る。トランシーバーがなり機動隊の動きがはじまった。

「天浪だな」「よし、サイレン鳴せや」物見やぐらにかけあがる同盟員、

サイレンが鳴りひびきドラムカンが。同盟内のあらゆるサイレン、ドラムカンを動員と闘争の開始を上げさせた。

ヘルメット、ハチマキ姿で小型トラックに分乗して出てくる反対同盟員。畑の中から、腰にぶらさげたハチマキを麦ワラ帽子に締めて、泥足でそのまま本部に到着する者。

「場所はどこだ」「天浪だ。〇〇さんあなた、もうちつと車に人をのっけてけや」「気をつける今日は向こうも多いで」「多くたってしょうがあんめえよ! いやだつていったつて、向うは来るっていうだから」

十時、闘争は開始されていた。盾をかまえて完全武装の機動隊。約五〇〇名の反対同盟からシユプレヒコルがとど。「機動隊は帰えれ」かけ声をあげて。前面に出る婦人行動隊のデモ。

「解散せせろ! 抵抗すれば検挙」。わきあがるかん声。土つぶてが飛び、機動隊の紺色のヘルメットと同盟の白ヘルメット、麦ワラぼうしが入り乱れる。婦人のかん高い声、「わっしょい、わっしょい」人糞尿を入れたオケをかついだ同盟員が表われ、機動隊にぶちまける。闘争は午後五時半まで続いた。

これは昨年四月から七月にかけて続いた現地での闘争の一場面である。

二、三月闘争の全国的爆発によって。闘いの先手をとられ、事業認定まで粉砕された空港公団は、闘争のまき返しをはかった。

反対闘争の燃えあがりには条件派農民を動揺させ「いくら頑張っても、どうせお上のやる事だから負けちまう」と考えていた事はそうではなく、生活の防衛がなんたるかをはっきりさせた。

公団は、建設計画が順調にいつている事の逆宣伝をあらゆる報道機関をつかって開始した。反対同盟が闘っても、それは孤立しているし、用地の買収は進んでいるだ、彼等はそう主張した。

四月六日、新聞は条件二派の部落協会長岩沢正春と地権者会の神崎武夫が、今井空港公団、友納知事、中曾根運輸大臣立ち会いのもとに「用地買収価格に関する覚書きの交換をとりかわした」ことを大々的に報道した。「四月中に条件派の九〇%は買取契約を完了する。今度は反対同盟の説得に入り

たい。反対同盟は七百戸といつても、用地内はその七分の一にすぎないし、早期妥結が実現すると考えている。公団側の計画としては五月ボーリング。六月末工事開始としたい。この談話はいわば公団側の戦闘宣言であった。明らかに彼等は、国家権力を背景に、買取契約を強引に実現したい腹を持っていた。

かくして四月一九日条件派の宅地、田畑の立ち入り測量(買取面積、価格決定)のための査定開始のために、はじめて現地内に、機動隊があらわれた。トラック、パトカー等々に分乗した彼等は「交通整理のためにやってきた」と主張した。だがこの十九日を契機、七月十八日の立ち入り測量「完了」まで約三カ月間、この機動隊、空港公団は連日、現地立ち入りを行こなった。

朝九時、公団職員四〇〇名、機動隊三百名は成田を出発して、何班かにわかれ現地に入ってきた。午後五時半まで、風が吹こうと、豪雨であろうと、祭日、日曜日であろうとこれは続けられた。交通検問が農道内でおこなわれ、買物帰りの反対同盟員の主婦にはいやがらせをした。抵抗するものには警棒の乱打と逮捕が行こなわれた。団結小屋に入って同盟員、学生に対するリンチや、やぶの中にひきずり込んでの暴行があいついだ。六月に入ると空港公団職員は全員クリム色のヘルメットを被り、手に四尺の角材を持った。催涙液のポンペを背負い、ふくめんをした数十名の私服が表われた。数は多い時には二千名をこえ、現地一帯を完全な監視体制下においたのである。

六八年春から夏に三里塚でどのような言語道断な弾圧がおこなわれたか、報道機関はひと言も掲載していない。

闘争は第二段階に入っていた。二、三月に反対同盟が切りひらいた成果を現地内に定着できるかどうか、そして空港公団側は後退した計画をとり戻し進展させるかどうか。

反対同盟はよくこの課題にこたえたのだ。農繁期の真最中、連日の動員に耐え、おどかしや切り崩しに耐えた。この最初の現地闘争に勝利したといえる。

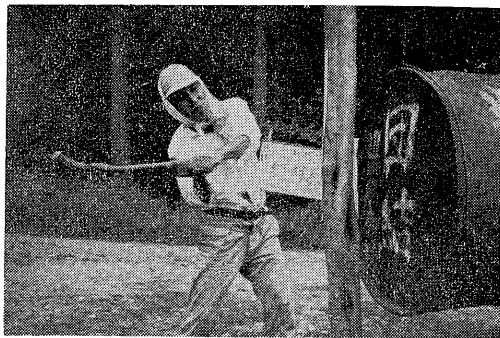
「五月ボーリング、六月末工事開始」は、「七月ボーリング、八月末工事

開始」となり、さらに九月ボーリング、十月工事と移り、最後に「年内のボーリングと工事開始は見送る」となったのである。

各新聞は、建設計画の遅れを報道した。「暗しように乗り上げた空港計画」(八月六日の日経)「どうなる建設のメド」(東京新聞)そして八月七日改めて空港公団側の発表した空港建設マスタープランは「当面A滑走路の建設にしぼる」と縮小されていた。

八月二四日ひらかれた、反対同盟単独の総決起大会は、同盟が健在であることを示していた。全員が手に鉄、棒を持ち、その数、千余名に達した。この期間を通じ、同盟は質量共に、全国農民闘争の先頭に立ち得る部隊へと成長したのだ。

又この期間、各地区反戦青年委の現地への援農、全学連の学生の民宿がっつき、闘争の定着化は一層進んだ。



ドラムカンを鳴らして公団、機動隊の立ち入りを知らせる同盟員。

闘争日誌

四月六日 中曾根運輸大臣、今井空港公団総裁、友納千葉県知事の立ち会いのもと条件四派との「用地買収基準価格についての覚書き」を交換

四月十九日午後二時 機動隊一五〇名が「交通整理」と称して現地立ち入り、七月十八日までそれがつづく。反対同盟パトロール隊による第一回目の抗議闘争。

四月二十一日午前四時 機動隊一五〇名は岩山部落の麻生禎一氏以下四名宅を奇襲、二月十四日の公団職員への暴行を理由に逮捕。即日、反対同盟数十名は千葉県警に抗議。以来釈放まで連日抗議行動。

四月三十日 逮捕された麻生禎一、岩沢藤次両氏の「勾留理由開示公判」。

反対同盟一五〇名が参加。地裁前で傍聴券をめぐって闘争。

五月一日 成田市メーデーに参加、成田市内ジグザグデモ。パトロール体制日直が強化され、終日現地内監視。

五月三日 空港公団は「五月七日ボーリングによる土質調査とクイ打ちを主体とした測量開始」を宣言。

五月四日 各支援団体への動員指令。

この日、はじめて空港公団と機動隊への闘争を木の根部落地点で開始した。同盟員四〇名。公団を撃退できず。

五月六日 午前十一時、木の根部落にて闘争。サイレン、ドラムカンがなり約三〇〇名の同盟が集結。機動隊と公団を分断し、公団職員をひきづりだして抗議。十二時半、空港公団、機動隊とも撤退。

五月六日 七日のボーリング実力阻止に向け夜総決起集会。全学連四〇〇名が宿泊。

五月七日 早朝より闘争。

機動隊二千名動員され、数カ所で、反対同盟と闘争。ボーリングは阻止された。同盟動員数八〇〇名。

五月十二日 二回目のボーリング打ちが知らされ、この日も早朝から闘争。青年同盟島寛征氏が逮捕されリンチを受ける。即日、成田署に抗議、警察前は同盟一〇〇、援農中の三多摩反戦青委一〇〇で完全に埋まる。七時、島氏の釈放をもちとる。

五月十四日 四千米最南端の桜台に公団が入ったことが知らされ、動員。公団は成田市方面にいち早く逃げさった。

五月十五日 早朝より公団と機動隊の動きがあわただしく、取香部落より始じまって、天神峰闘争本部横の条件派宅に立ち入り測量のため侵入。二時闘争開始、黄金作戦、投石で闘争。五時敵は退散。同盟員数六〇〇名。

五月二十七日午前三時半 機動隊三〇〇名と私服警官五〇名が、天神峰本部と駒井野を襲撃、宿泊中の全学連現闘メンバーにリンチを加え、二名を逮捕。同盟員、学生各々一名が重傷。午前四時から機動隊との闘争が開始され終日抗議行動、同盟員五〇〇名。逮捕者二名、重傷入院二名。

六月五日 木の根部落地点で、敵と闘争。同盟三百名の部隊は、公団を撃退その後機動隊との闘争になり、警棒による乱打をうけた。

又機動隊一五〇名は駒井野団結小屋を襲撃、支援の全学連現闘学生をリソチ。重傷四名、入院二名。

六月十四日 木の根部落地点で闘争。空港公団はこの日、はじめて全員ヘルメットを着用し、きわめて高圧的。十一時サイレン、ドラムカンを鳴らし四〇〇名で闘争。機動隊は三〇〇名。

六月十五日 再び木の根部落にて、朝から闘争、機動隊と衝突、婦人行動隊員浜野さんが逮捕された。私服警官がみついたりしたことをふくめ負傷者八名。

夕方より夜にかけ千葉県警に浜野さん釈放の抗議闘争。十時釈放をもち

とる。

六月十九日 東峰部落地点で闘争。投石と警棒の闘争、機動隊三〇〇、反対同盟三〇〇。

六月二十二日 再び東峰部落で闘争午後十二時から夕暮まで闘争。

六月二十四日 この日も東峰部落で闘争。公団機動隊を追い出す。

六月二十七日 四たび東峰部落にて闘争、麦畑の中で乱戦となり。投石、デモで闘う。反対同盟三〇〇。逮捕者一名、夜千葉県警に抗議。

六月三十日 三里塚第二公園で、相続く弾圧と攻撃をはねかえすための全国総決起大会。全学連、反戦青年委員会、労組、反対同盟を含くめて五〇〇〇の部隊が、天神塚まで用地内縦断デモ、空港公団はこの日現われることが出来なかった。

七月二日 豪雨について午前十時から闘争、この日空港公団は十余三南部落に侵入した。機動隊の数五〇〇。反対同盟は、それぞれ部隊編成をし、陽動作戦を展開した。ふりしきる雨の中を午後五時まで闘争。反対同盟動員五〇〇。

七月三日 十余三部落で闘争。数日前より私服警官の四尺の角材、ガスボンベ、ぶく面姿がめだつた。検問は非常に厳しい。

七月五日 同じく十余三部落にて闘争。七月十一日 A滑走路南端の桜台で闘争。婦人行動隊二〇〇名を中心にしてデモで包囲、午後五時、公団は退散。

七月十二日 芝山町千代田で闘争となった。この日機動隊は部隊を増強し約五〇〇名。数カ所で激戦となる。

まず始め接触した老人行動隊は、人糞尿で対抗。行動隊長の菅沢一利氏(七七六)が逮捕された。次に婦人行動隊との闘争。スクラムでの押し合い。



空港公団の立ち入り測量のため現地に入った機動隊。



空港公団と機動隊への抗議に向う反対同盟。

午後、闘争は散兵戦となり、畑地いっぱいまで広がっての闘いとなった。逮捕者同盟二名。つづいて映画班一名。

七月十三日 芝山町横堀部落で闘争。

七月十四日 この日も横堀で闘争。

七月十五日 同じく横堀にて闘争。

この三日間は、反対同盟の組織だった抵抗がめだち、機動隊の車は投石に安全にいたためつけられ退散。戦闘における同盟側の勝利。逮捕者一名負傷八名。

七月十七日 立ち入り測量は、すでに終盤をむかえていた。公団側の発表によれば明日がその最終日である。

この日反対同盟は立ち入り測量個所にバリケードをはり、早朝から闘争体制に入った。

バリケードをはさんでの闘争は激突となり、終日、機動隊との間に攻防がつついた。反対同盟千名、機動隊七百。逮捕者一。

八月二四日 反対同盟の団結強化をめざし、同盟単独の武装デモ。参加者千名。

五、関連事業農民も含んだ闘いへー来るべき敵の大攻勢にそなえ闘う準備の強化を

備の強化を

二六八年九月〜六九年二

四月からの闘争を引き続いて、この期間は成田市長選へ積極的介入をしながら、闘争を空港関連事業地域の住民のところに広げていった。成田ニュータウン、根木名川改修工事地域、資材置場の土屋。資材輸送道路の吉倉部落へ。

空港公団側は曲がりなりにも七月十八日をきして立ち入り測量の第一回を「完了」として発表し、周辺地域の関連各事業の実現を伴いながら反対同盟の孤立化をはかっていた。夏、三里塚で何がおこなわれたか、これを成田市全域にひろめ、公団側のこうした攻撃に対して、現地のみならず関連各事業を含くんだ計画の挫折を目的に精神的闘いがつづいた。

春から夏にかけてと同様に連日反対同盟宣伝車が広報活動に従事し、パトロール、日直体制が敷かれ、周辺地域へのオルグが飛んだ。成田市長選は敗れたとはいえ、自民党の藤倉約一万票、反対同盟推せん山内氏が八九〇〇票というこの票決は、運動のひろがりを示している。このような中で成田ニュータウン建設反対同盟はその闘いを強化したし、十二月には根本名川拡幅反対同盟が結成された。

全国各地での集いが開催され、それへの参加は同盟内に闘争の全国的視野をうえつけた。

だが空港公団の攻撃も進行している事は事実である。二月から七月に至る闘いは厳しかったといえ、明らかに序盤戦なのだ。現地闘争の経験をつんだ敵側が、次に出て来る手は本格的な大攻勢である。闘争が四年目をむかえ、別の段階の中で、この攻勢をどのように打ち返して行くか、まさに同盟にか

けられた課題といわねばならない。

闘争日記

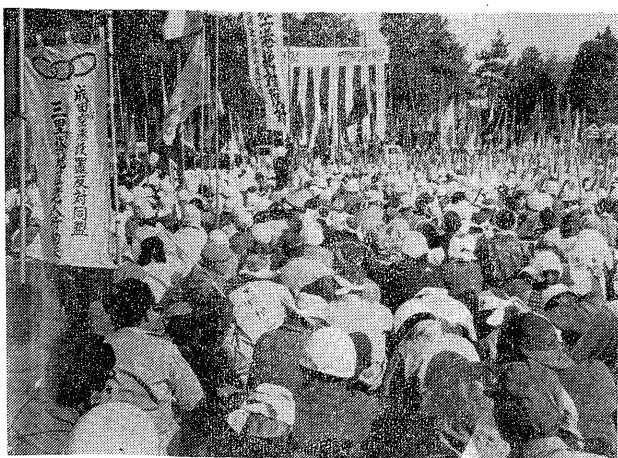
六八年九月 日直、パトロールの監視体制がつづき、選挙闘争開始。周辺の関連事業への宣伝とオルグ。連日の動員数四〇〜五〇。延べ、数千名を越した。

十月十五日 成田市長選。自民党藤倉武男一万余票、反対同盟推せん山内氏八九〇〇票。市議補選、自民党候補九千余票、反対同盟推せん村田氏七五〇〇票。

十月〜十一月 空港公団は盛んに、建設計画進行の宣伝。十一月二四日 三里塚第二公園で「三里塚空港粉砕、ボーリング調査実力阻止」の全国総決起集会を開催、闘争開始来最大の規模に達し、県警、空港公団に驚ガクを与えた。天浪まで全員デモ。反対同盟千名、全学連四千。反戦青年委その他三千名。

この闘争によって十一月ボーリング、実施紛砕。公団側は年内の調査、工事開始は困難を発表。

十二月初旬 空港公団と三回の闘争、いずれも撃退させる。



11. 24 全国皆決起集会

十二月十九日 パトロール中の青年同盟が公団を発見、これを追いだす。しかし千葉県警は、私服、警官を大量動員し二名を逮捕、この日より反対同盟は連日百名が、千葉県警に抗議行動、
十二月二十九日 反対同盟三百名は、二名の釈放を実現するため千葉県警に抗議。二名の釈放をからとる。
六九年一月十六日午前四時 千葉県警は、十二月十九日の闘争を理由に青年同盟長谷川君を自宅逮捕。同日同盟は千葉県警に抗議。現在に至る。
昨年暮から本年頭にかけての闘争の特徴は、警察の態度が非常に強化され、中心メンバーの逮捕、長期勾留による、闘争破壊がつづいていることである。

反戦青年委員現地闘争本部 からのアピール

一九六九年三里塚闘争勝利にむけて

反対同盟への官憲の組織弾圧をはねかえし三月事業認定認可粉碎四月関連事業開始を実力で阻止しよう

六九年は反対同盟なかんずく青年行動隊に対する官憲の組織弾圧をもって始まった

六八年の一年間を通して現地三里塚、芝山を軸に闘いぬかれた三里塚空港粉碎闘争は、政府公団の建設を大中に遅延させ、そのプランに致命的打撃を与えた。

闘いは、七〇年安保強行に狂奔する佐藤内閣、日本帝国主義の強権的人民支配を赤裸々にバク露し、今やそのあくなき犠牲の強要が農村の深部にまでおそいかかってくることを、全農民に示した。

そして闘いこそが、日本帝国主義による犠牲の強要をはねかえし、農村の矛盾と荒廃を解決する道であることを明らかにした。三里塚芝山連合反対同盟の闘いは実に、労働者、学生に次ぐ日本農民の帝国主義圧制に対決する巨大な烽火であった。

米騒動から激発する小作争議をもって日本帝国主義権力に肉迫した日本農民が、戦後農村のブルジョアの再編の中で、日本社会の背景にしりぞかさ

れ、その反逆のエネルギーを封殺されてから久しく、突如として立ち上った三里塚闘争を特殊な一例とする見解はいぜんとして後をたたない。

だが、六八年一年間のきびしい闘いを貫徹した今日の反対同盟の姿の前に、そのような見解は水泡と化した。誰よりも日本帝国主義権力そのものが、そのことを自覚したのだ。今や政府公団は、七一年完成のタイムリミットにあせり狂いつつ、だが同時に、政府権力に対決する反対同盟の存在そのものを抹殺せんとする新たな攻撃を開始している。昨年末、次いで本年一月十六日と続く青年行動隊への弾圧こそ、その内容である。県警本部は、公然と青年行動隊への組織弾圧を宣言してはばからない。そして青年行動隊への弾圧を通して、反対同盟の動揺をつくりだすところにそのねらいは定められている。

政府公団のプランは次のように定められた。

三月事業認定認可、四月準備工事関連事業開始、四千米滑走路地点への収用法適用、九月本工事開始である。

すでに六八年闘争によって約一年間の遅延をよぎなくされた政府公団は、

七〇年安保強化の国内体制特に全土総基地化の支柱ともなるべき三里塚空港建設のぎりぎりのタイムリミットに迫りつつある。だが、そうであればあるほど、一切の権力を発動して空港建設を強行せんとしている。

この、日本帝国主義による戦後初の巨大空港建設は、こんにち、条件派農民に対する土地収奪をかなりのスピードで進行させ、歴大な関連事業関係の住民にそのほこ先をむけ、一方四千米滑走路予定地の条件派に対する買収に狂奔しており、その状態は決して予断を許さないものがある。

こうした事態の上になつて、政府公団のプランは次の様に定められた。一年間の遅延をよぎなくされた事業認定の認可を本年三月末に強行し、四月より資材置場、運搬道路、ボーリング等の整備工事及び、ニュータウン、根木名排水路をはじめとする関連事業開始、次いで四千米滑走路予定地の反対派農地に対する強制収用法適用、九月四千米本工事開始である。これが政府公団の最終建設プランに他ならない。

いまや、政府公団にとって、このプランのひとつでも狂えば、彼等の死命を決するものとして、致命的打撃をうける事態にあるのだ。三里塚闘争は、実に日刻みの激闘の段階に入ったのである。

三月事業認定認可粉碎、一切の準備工事の開始を武力で阻止しよう！ 七〇年安保粉碎めざす沖繩闘争、学園闘争との結合こそ勝利のカギだ。

六九年こそ、政府公団にとつても、空港粉碎の闘いにとつて、文字どおりの天王山であることは、いまや明らかである。そして、三里塚空港建設問題をめぐるとそのカギが、現地反対同盟と戦闘的支援部隊の手にしつかりとぎられていくことも又明らかである。

勝利の展望は何か、第一に、当面する反対同盟に対する組織弾圧をはねかえし、三月事業認定粉碎、一切の準備工事開始の武力阻止をたたくことである。なぜならば、この闘いこそ、彼等の建設プランをずたずたに瓦解させ、同時に、そのことによつて、逆に条件派及び関連事業関係の中間派住民の流動化、反対同盟側への獲得を可能にするからである。政府公団の弾圧

四 資 料

一、半径二〇キロ周辺の民家に被害をおよぼす三里塚空港の騒音

三里塚空港の騒音について、政府と空港公団は、非常に簡単にふれているだけである。しかし、三里塚空港が建設され、SSTなどの超大型機の発着がおこなわれた場合、半径二〇キロ周辺、約二万戸の農家が約七〇ホーンの騒音下におかれようとしている。

普通、各住居、教室などにおける騒音の最大許容量は右の表の如くといわれているが

(表3) 騒音許容量

室 名	ホ ン
放送スタジオ	25
音楽ホール	30
病院	35
劇場(500人程度)	35
教室	40
議室	40
住宅	40
アパート	40
映画館	40
レストラン	50
工場	60-70
図書館	40

現在の国内空港の騒音被害については次のような事があげられている。大阪空港の例をとると、

- (1) その結果、大阪空港の周辺では次のような状況を生みだした。
テレビ、ラジオが受信できない。
(2) 老人が鼻血を出し、寝ている赤ん坊が泣き出す。

が、未曾有の規模に達しようとも、昨年の事業認定粉碎の闘いの経験をすでに有する我々にとつて、先制的に闘いにたち上ることが準備されねばならない。三月、三里塚総決起こそ、我々の闘いの第一弾とならねばならない。

第二は、六七年十月以来の三里塚闘争と日本全土に於ける反戦、安保粉碎の激闘との関連から教訓を引きだし、三里塚における闘争が、いまや日本の安保粉碎闘争の巨大な構成部分をなしていることを明確にすることである。

六七年十月八日の羽田闘争と十月十日の三里塚でのクイ打ち実力阻止闘争以来、六八年の労働者、学生の安保粉碎の諸闘争は、奔流をなして、三里塚に集結し、六八年三里塚闘争の巨大な条件をなしてきた、政府公団は、全国化した、反戦闘争と三里塚闘争の戦闘的結合を無視して、動くことはできないのだ。このことは、六九年こそ、三里塚闘争の全国的決起を更に強く強化し、沖繩奪還安保粉碎、学園闘争とかたく結合せねばならないことを示している。

すでに開始された六九年の激しい闘いに、三里塚闘争は、労、農、学、戦闘的団結をもつて荒々しく登場するであろう。そこにこそ、三里塚闘争の勝利の展望はあるのだ。

三里塚空港建設実力粉碎！
三月事業認定粉碎、四月準備工事開始実力阻止めざし、三月三里塚闘争に決起しよう！
沖繩奪還、学生闘争勝利、安保粉碎とかたく結合し、三里塚闘争を全国闘争として闘いぬこう！

反対同盟に対する官憲の組織弾圧に抗議の嵐をむけよ！ きびしい弾圧に闘いぬく青年同盟、青年行動隊に全国からの支援を！

(表4) 伊丹空港と騒音

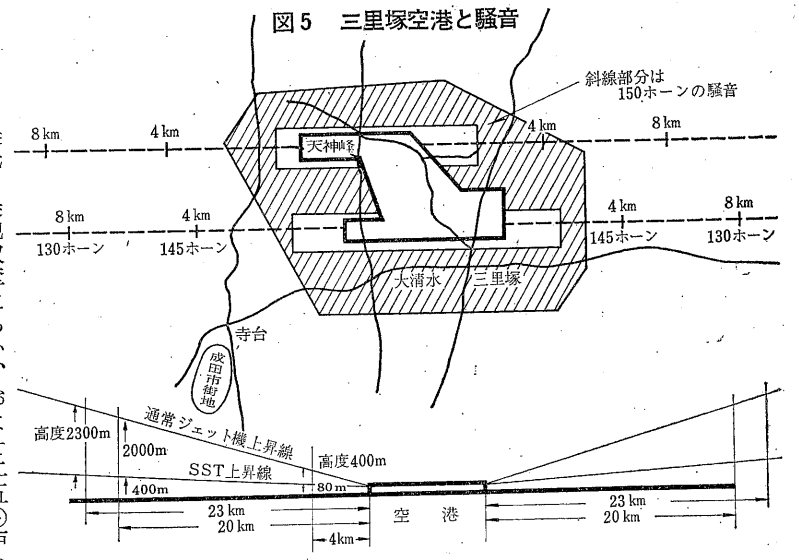
都市名	空港よりの距離	ホ ン
伊丹市	2km	74~100
川西市	3km	83~105
豊中市	3.5	67~100
池田市	3	76~95
尼崎市	6	76~85
塚本	5	86~93
西宮市		73~95

- 右の図を参照してみると
- (3) 妊婦の流産がひん繁に起る
 - (4) 夜間に屋根瓦が壊れたかと思える
 - (5) ノイローゼ、精神病者の続出
 - (6) 乳牛のさく乳量の減退。鶏の産卵の減少、
 - (7) アパートの空屋。
- そして病院、学校関係における治療、授業の中断は絶えまなくおこっているのである。
- 現在の空港の生み出す騒音被害でさえ、このようなものである。三里塚空港建設に伴って生じる被害に測り知れないものがある。

二、空港関連各事業について

これまで、いくつかの所で述べられて来たが、友納知事を中心とする千葉県政の考えている空港建設計画はただ空港のみではない。それはいくつかの関連事業を含くんでいるのだ。以下簡単にそれらについてふれてみた。

- (1) 成田ニュータウン建設計画 現在の成田市、北部にあたる田畑山林をぶして人口六万人の新しい都市を造る計画である。建設公団側は、このニュータウンを、空港職員用タウンとして計画している。三里塚、芝山農民と



(表5) 騒音の大きさとその影響

耳に痛みを感じる	120	造船工場等のリベット打ち 地下鉄の最大騒音
聴力に障害を生む	100	高架線ガード下 地下鉄車内
電話使用困難 ノイローゼ、精神 障害を生む	80	繁華街 防音電車内
睡眠がさまたげら れる	60	普通の会話
授業を行なう教室 の限界	40	静かな街路
	20	さ、やき声
	0	

(日本音響材料会編、騒音ハンドブック参照)

同様に、この農民も農地収奪にあい、およそ二五〇戸の農家が立ち退きを要請されているのが現状だ。

昨年この地にも、成田ニュータウン反対期成同盟が結成され、三里塚、芝山と共闘して来た。先頃、この地に成田市議会が、ゴミ焼却場の建設案を提出したところ、地元民の反対闘争の中でそれは廃案となった。空港に伴ってここでも闘争が強まろうとしている。

(2)土屋資材置場建設計画 成田市街地のすぐそばに建設を予定しているもので空港建設資材をここに運び入れる計画である。広さ十四町歩の田畑が埋立てられようとしている。この計画は、他の関連事業以上に進展していな

い。昨年は完成と聞いていたが、地元民のほとんどの反対で手づまりとなっている。又、国鉄成田線成田駅に、資材をこの地に入れるため、線路の延長を計画している。

(3)資材運搬道路建設計画 土屋の資材置場から、空港予定地に資材運搬するもので、一日二五〇〇台のダンプカーの運行可能にする計画である。地点は成田市街地から駒井野団結小屋附近まで至る。又この道路建設は一方のみでなく、数カ所で予定されている。

(4)空港用排水路河川拡幅計画 本文「二」の所でふれられているが、根木名川、高谷川などの改修をさしているが、改修の対象になって河川は現在狭ま

所で一メートル幅しかない小川である。これを五五メートルから一二メートルに拡幅しようとするのであるが、このため、空港北端から成田市街地を通り利根川へ注ぐ流域と南端から芝山町を縦断し九十九里浜にいたる流域の広大な面積が、完全にとりつぶされようとしている。

空港公団は、農業用水路だと強調しているが、田畑がつぶされては、全く意味のとおりない事である。しかも拡幅される河川床は、周辺の田畑より水位が高く空港廃液が逆流し、農作物を全滅させることは必至である。

地元出身の自民党代議士水野清は、このことについて抗議されたところ「それでは田んぼに土を入れて、土地を高くしたらどうだ」と答えている。

田んぼに土を入れたら、それは田としてもう用をなさないのである。

現在、根木名川改修に対する反対闘争が進み、昨年十二月反対同盟が結成された。今年二月上旬の各新聞の千葉版はこの改修について、「お手あげの河川改修」という記事をのせ、地元民の反対で、全たく進展していないことを指している。

三里塚芝山連合反対同盟
三里塚空港反対青年同盟

(5)東関東縦貫高速道路建設、東京からの快速鉄道建設計画 空港建設にともなう道路、鉄道の建設、拡幅は老大なものにのぼる。東関東高速道路は、東京から埼玉に至るもので、成田市附近では空港のすぐ近くを通る。福島県本宮では道路建設に農民が反対しているが、成田でも、その反対が起っている。空港北端に位置する大山部落は、この道路インターチェンジ建設のため、部落全体が、立ち退きの要請をうけようとしている。

(6)芝山町工業団地建設計画 空港と関連して工場を計画するもので、東京太田区にある鋳工場が移転を予定されている。この工場は附近住宅への被害(騒音、悪臭、その他)がひどく移転を要求されているものである。総面積四八ヘクタールが、このため取りあげられようとしている。

反対同盟の基本的原則と闘争の姿勢について

十一月十七日の金曜集会は空港反対同盟発足以来の一貫した闘争の大方針と組織的原則を全体的な決意を持って再確認したことは、現在の反対同盟の直面した闘いの中で特に重要である。

第一に外郭線上の杭打ちの完了や、極く一部における買収契約の成立、また大橋運輸相の突然の現地乗り込みという既成事実のデッチあげ等々の一連の事実は運輸省及び公団の欺瞞的政治攻撃である。政府、公団の現地攻撃はげしくなるこのような事態の中で、我々反対同盟はその闘いを一層強めねばならない。反対同盟は空港建設にあくまでも絶対反対し現地における政府公団の介入を一切実力阻止をもって排除するというこの闘争方針のもとに闘う農民の同盟に連帯するすべての人々は、等しくその誇りを持ち、責務を果さなければならぬ。

第二に、三里塚における空港反対闘争は、単にこの地域の限定された闘争ではなく、全国の闘争を連帯する人々が注目しており、三里塚闘争が現地において敢然と闘われると同時に、全国、全世界の人々に三里塚闘争の事実を訴え政府の三里塚空港建設に反対して闘う決意を持つすべての人々を現地に結集し、かたく連帯して闘うこそがまさしく空港闘争を勝利する基本的原則であることを再確認し、表明することが出来た。

この以上のような原則は、闘われらの決意としても、同盟の組織の基本的方針としても、今までずっと貫徹され、今後も決して変り得るものではない。これらの基本的原則を三里塚闘争において実現するのは、闘う熱血と勇氣を持つ反対同盟の同盟員一人一人でなければならぬ。

我々はその後、「十一・三、三里塚空港粉砕、ベトナム反戦、青年総決起集会」を契機に現地に、結集しつつある青年諸組織、支援団体のうちから、

三、以下の資料は、日本共産党への弾劾などを決議した反対同盟の声明文類である。闘争開始以来、反対同盟は数多くの抗議文、声明文を採択しているが、その中、重要と思われるものを収録した。

今日では闘争の思想的内容はさらに進んでいるわけであるが、これらの文章は、過去二年有余の闘争過程における反対同盟の闘争姿勢、思想内容を示したものである。

資料中四一頁の「声明文」は共産党弾劾のため出されたものである。四五頁の「成田二四時」放映中止の抗議文は、当時、TBS労組、TBS当局への反対同盟抗議団数十名と共に提出された。今日、報道関係にたづさわる者にとって重要な問題提起をしていると思われる。

東京地区反戦青年委員会の代表者動力車労組千葉青年部からの現地部隊代表者、及び今後共闘体制を整え共に闘うことを確約する全学連の代表者と懇談会を設け次の三点について了解し確認を得た。

(1) 三者の代表者は、三里塚闘争を「支援」するというよりも、労働者、学生各々の立場と位置から、自らの闘うべき課題として、勝利すべき任務として現地に結集し、闘う農民の同盟のもとに強い共闘の決意を持つ。

(2) 三里塚空港の建設はベトナム戦争の拡大と激化の中で第二の羽田として、むしろ一層大きな羽田空港として実現され、実質的な内容的軍事基地化するのには自明である。現在の国際情勢と、安保体制の中で、軍事空港と民間空港との現実的差異はない。労働者、学生は農民の強制的土地取り上げに反対し農民の生活防衛闘争を支持すると同時に、ベトナム人民、アメリカ人民とまったく連帯して闘いを展開しなければならぬ。この意味において三里塚空港の建設に阻止されなければならない。

(3) 三里塚空港闘争を現地で闘う農民組織（反対同盟）の創意と方針を最も尊重し如何なる行動においても現地反対同盟の同意のもとに、反対同盟との綿密な連絡を保持し、共闘体制を整えることを約束する。責任体制はこれを明確にし、最低限各単産組織、団体ごとに責任の所在を反対同盟に明らかにする。

我々はこれら三点が三里塚闘争の共闘におけるもつとも基本的な原則と条件に合致することを確認することができる。三里塚闘争が全国的に注目されるに連帯の意志の表明するすべての人々に対し、現地の我々は大きな敬意と連帯の志を明らかにし、共に闘いを進めなければならない。

政府、公団は一年半におよぶ現地のねばり強い反対闘争に拒まれ、彼等の意図は実質的に何も進展させることが出来ない。だが我が敵は手をこまねいているわけではない。反対同盟の熱意と警戒の虚をついて、あらゆる手段で今後も策謀するだろう。そこで我々は次の決意を反対同盟の同盟員が確認して勝利の道を力強く進めて行こう。

それは一党一派の利益や党略に基づく謀略の渦の中に巻き込まれ、土地と命を守る真検な闘いを組織する反対同盟の偉大な力と団結とにひび割れを生

じ分散させ、知らず知らずのうちに、政府、公団の攻撃のはげしくなるのを許してしまうのか、それとも支援組織の全勢力の現地結集をはかって強力な空港建設実力阻止の闘争を断固としてくりひろげ、三里塚闘争の勝利の展望を固い団結の力で切り開いていくのか、この二つに一つの道以外にない。この態度決定こそは、これからの反対同盟の命運がかかっていると考えねばならない。

反対同盟の一年半の闘いの貴重な蓄積と体験とは、今やその内外の情勢に直面して重大な試練に立されている。

団結こそ反対同盟の武器であり、すべての闘う者の全国的結集が必要であり、ひとりひとりの闘いへの誇りと決意が重大である。

一九六七年十一月二十四日

声 明 書

吾が三里塚芝山連合反対同盟は昭和四十一年七月政府が住民意志を無視して新国際空港設置を決定し強行したことに始る。

連合反対同盟の目的は住民が空港反対の意志を結集して、全国の民主的勢力を叫び大団団結のもとに政府の暴挙である国際空港を粉砕し農地と生活を守り強いては、新空港の基地化を防ぎ日本の平和を守る為であります。以来一年六ヶ月に渡り私達はその目的の為に寝食を忘れて争って来ました。

六月二十六日前運輸大臣の来成、十月十日の強制立入測量又は十月下旬の第六標点に於ける杭の復元工事と何れも強大な警察権力を相手として争い、三名の逮捕者と九名の負傷者を出しながらも政府公団が公然とは一歩も現地に入ることを許さないのは、同盟員の皆さんの勇猛可敢な行動と全国的による民主勢力の支援の賜であります。

現在、現地には吾々の正しい反対運動を理解しこれに協力しようとする革新政党的諸団体、各種労働組合、進歩的學生と数多くの全国の仲間がオクルグとして、時には援農、又ピケ要員として入っております。そして、それぞれが各任務をもち、部所、分担に従って支援を続けて居ります。吾々はこ

の支援団体を何んのために支援を要請し現地に入っているのか？ それは明らかであります。敵、即ち空港を設置しようとする政府公団が国際独占資本と手を握り、余りにも強大な力を以て吾々を弾圧し、空港を強行しようとするからであります。之を押しかえし空港粉砕のためには、吾々自身の力を余す処なく發揮すると共に全国的規模のもとに民主勢力を結集しなければならぬからです。言葉を変えて言うならば

強大な国家権力に抗し空港粉砕するためには妙薬もなければ特効薬もありません。唯あるものは、地域住民の反対意志と全国民主勢力の支援の方を結集する意外に方法はありません。——その為に支援を受け容れて居る訳です。然し吾々は、この支援団体を無条件に受け入れて、その行動を容認しているのではありません。空港粉砕の目的を実現するために、地域住民によって構成されて居る反対同盟の自主性を尊重し、その統制にふくし、同盟の団結を強固にし更にその戦力を増大する限りに於て民主勢力の支援を許さるべきであります。

処が日本共産党は十一月三日の三里塚集会以来連合反対同盟に対して、その方針の変更強要するとか、更に十一月十四日朝日新聞の仲介によって連合反対同盟の戸村委員長、瀬利、石橋、両副委員長が大橋前運輸大臣に座談会の形式を以て抗議した際「同盟幹部が運輸大臣に会談を申し入れたとか」事実をまげて喧伝し、又「同盟幹部が条件派に成った」とか「富里村二重堀に同盟幹部二人が四町八反の土地を購入した」とか事実無根な事を言いふらして一連の反幹部部工作を繰返して居ります。

このまま放置したならば、組織は破壊され、やがて戦力を失う危険があります。彼等は何んのためにこの様な反幹部部工作をするのでありましょうか。その意図は明らかです。

A 同盟幹部を意識的に中傷することによって幹部と同盟員の引きはなし組織を動揺させる目的であります。

B そして組織の動揺に乗じて一挙に現幹部の責任を問い、退陣を求めて同盟の主導権を握ろうとするものです。

C 更にその様にして来年二月の芝山町議選に於て、共産のせんどりに乗った同盟員の票を共産党の公認候補に結びつける意図があるのです。

およそ政党は、政策を通じて国民に貢献すると共に空港の具体的な闘争に当っては、団結を守り反対運動の戦力にプラスする様支援体制を作らなければならぬのであります。

これに反し、反幹部闘争、組織の分裂を来す様な行動をする政党は吾々にとつて、政府公団と同様であり、如何なる政党と雖も、これを排除しなければならぬ。

今回の日本共産党の反幹部攻撃、組織破壊工作は同盟の勝利の為の生命である団結を阻害するものである。よって今後共産党がこの様な態度を改めない限り、支援並に一切の介入は断固として排除するものである。

右声明します。

昭和四十二年十二月十五日

三里塚芝山連合空港反対同盟

組 織 破 壊 の 実 例 と その 真 相

共産党は反対同盟の発足以来時には積極的に時には目にみえない様に反幹部部工作をくりかえして来た。

最近の一連の反幹部組織破壊の工作をみると

一、議事妨害工作

(1) 十二月一日木ノ根団結小屋の金曜集会

砂川の宮岡副行動隊長が激励の為、木ノ根団結小屋に来て金曜集会に出席した折、多数の党員及びその同調者を集めて木ノ根団結小屋を包囲してその集会に威圧を助えた。

(2) 十一月下旬千代田公民館の金曜集会

「支援団体の出席と発言を断る」と言う反対同盟の意向にもかかわらず、それを無視して出席し、組織的に議事の混乱をはかった。

③十一月下旬芝山同盟本部の実行委員会

開会を待たずに強引に発言し、又政党関係者の発言を拒絶されたにかかわらず共産党現地闘争委員長白井氏が発言し、且多数の意志を以て退席の要求するも、これを無視して尚も居すわった為議事が混乱した。そして最後は実力で議場外に連れ出された。

金曜集会及び本部実行委員会は、共に反対同盟の正式機関であり、他団体である共産党が反対同盟の意志を無視して発言すべき場ではないのである。現在までその会議に入場させた場合もあるが、それは事前に同盟の了解のもとに許可されて居たのである。

二、事実無根のデマ

(1)二重堀の土地問題

「敷地内の反対同盟の幹部で豚を飼って居る人、二人が、富里村二重堀に土地四丁八反を某銀行名義で買入れ、その幹部二名が、物件を見廻りに行ったので足がついた」と。

富里村立花共産党員が十月三日天神峰の闘争本部でデマを流す一方、三里塚同盟辻副委員長にも流して居る。

更に十二月五日堀内徳司氏が芝山反対同盟本部で「拡大宣伝して貰い度い」と当直数名の前で言っている。

事実

二重堀土地売買問題は、天神峰の条件派である越川正治（俗称イモ源）外家族三名名義で買ったものであり、売人は富里村小山吉五郎氏であり、三ヶ月程前に売買契約が出来たものを、十二月十二日午前九時半富里村農業委員会で所有権移転の為の審議の対象になって居るもので、同盟幹部には全々関係が無いのである。

(2)十一月十四日の朝日新聞の仲介による座談会について、

「この座談会の開催の申入れは朝日新聞ではなく、実は反対同盟幹部よりの申入れによるものである」

又「反対同盟が、公団と妥結した場合、条件派と同様に扱ってくれる様に申入れた」

事実

右の二つの事実は、堀内徳司氏が、十二月五日芝山本部で語ったものであり、

反対同盟幹部十名ほどが菱田、竜崎正治共産党員に抗議した際も、国会関係の情報として上部の党機関より流されたものであり、絶対信頼出来るのである」と称し居るが、その情報等については信頼すべき根拠は全々ない。

「反対同盟幹部よりの申入れである」とか「公団と妥協が出来た場合条件派と同様に扱う」と言う二つの点については、その会議の内容がテープにおさめられており十二月十二日午後八時よりそのテープが千代田公民館に於て録音が再放送されており、その事実に無いことが明らかにされており。

朝日新聞の座談会に於いて、公団側の戦術が、大量の警官を使つての強行方針から中立派の買収工作、条件派の切りくずし、反対同盟内部への工作と言つた様な強硬路線から柔軟戦術に代つて来ている。

現在、吾々反対同盟としても相手方の出方に順応する態勢をとらなければならぬ。

故に「問答無用方式から脱却したらどうか」との提案がなされ、実行委員会において決議された事実に基いて行われた会談であります。

(2)「内田寛一行動隊長が条件派になったのではないか」と十二月五日、堀内徳司氏が宝馬の石橋タバコ店でデマをふりまいたが、

事実

それに対して、内田寛一氏他数名の人が石橋タバコ店より聞いており、堀内氏が出まかせを言ったことは事実であるが、現に内田氏は、絶対反対で今日もまた闘争をつづけている。

反対同盟の直面した重大問題について

三里塚芝山連合反対同盟

昨年七月から闘争に入つて以来、我々反対同盟は様々な政府、公団の攻撃に会い、それと闘つて来た。一年半のこの闘いは口でいうほど簡単なものではなかった。反対同盟をつくり、今まで政治行動をした事のない我々が、政府に対する抗議や県庁での坐り込み、機動隊との衝突など、そのひとつひとつが新しい体験であった。

そして今、同盟それら過去一年数カ月の体験以上に新しい重大な体験をしているといえる。その新しい体験は、日本共産党と同盟との間で論争された反対同盟の基本的原則と闘争姿勢についてである。

攻撃は外からのみと思つていた我々に、こともあろうに内から加えられたこの攻撃は、我々同盟員の神経を疲れさせ、お互の間にいがみあい、疑惑を生み、本来ならば政府が運輸大臣をかえ、役人を送り込んで切り崩しや、ボーリングの実力行使をねらっているこの時に、以前にもまして同盟の団結と闘いを強めることを要求されているのにかんじんの同盟が内部の混乱に悩まされて来た。

一体この悩みは何んであったのか。その内容は、十二月五日から始じまった各部落での懇談会を通じて、明らかにしつつあるが、同盟が強さをとりもどし、一刻も早く政府の新たな攻撃を打ち返して行くために、もう一度しっかりと整理しておきたいと思う。

「三派全学連と反戦青年委員会について」

同盟は、その「基本原則」の中でこの闘争の勝利は、同盟の団結はもろろん「……三里塚空港建設に反対して闘う決意を持つすべての人々、団体を現地に結集」することによって出来る事を確認して来た。

なぜなら三里塚空港の建設は、我々現地農民の問題であると同時に、全国、全世界の闘う人々の問題でもあるからだ。「闘おう」と決意する全ての

人々を受け入れ、同盟の指揮下においてこそ勝利の展望が生まれるのである。

三派全学連と反戦青年委員会は、同盟との懇談会の中で、同盟の基本原則を全面的に受け入れ、同盟の指揮下で闘うことを確約して来た。彼等は三里塚問題を自分の問題としてとらえ、命を投げだして最後まで闘う決意をのべた。この人々を同盟が拒否する理由がどこにあるのか。共産党は同盟のこの姿勢について「全学連は暴力集団であり、羽田で住民に迷惑をかけた。彼等は右翼から五〇〇万円もらい、闘争を混乱させるために羽田へいった。このような暴力団を入れるな」と主張して来た。

戯れにたわ言をいうべきではない。一体どこの誰れが金をもらつて命をなくす人間がおるだろうか。全学連と反戦青年委員会は、佐藤のベトナムとアメリカ訪問を阻止するために羽田へ行ったのだ。その正当行動を国家権力と同じように非難する事がどうして出来よう。それともまた全学連が羽田へ行く前に五〇〇万円もらつたという確たる証拠をつかんだとでもいうのか。

むしろ我々もまた十月十日の機動隊二千名の攻撃を眼の前にした時、坐り込んで「実力阻止」の闘いをしなければならぬ事を確認して来たのだ。共産党ともあろう者が、執ように全学連と反戦青年委員会を非難するのは、己の誤まりを暴露されるからではないのか。事実十月十日の駒井野第二標点の杭打ち阻止の時、同盟の再三の説得にもかかわらず、立ちあがり、官憲に道をあけたのはなんとしても納得できない事であった。

同盟が「全ての闘う勢力を三里塚へ」の基本原則に基づき、全学連と反戦青年委員会を受け入れて以後、この三里塚において、共産党の取つて来た分裂行動は、何んとしても許しがたいものがある。

十一月三日の「三里塚空港紛争ベトナム反戦総決起集会」の前後にわたリ、同盟の制止をふり切つて、集会妨害のチラシをまき、参加団体を挑発するステッカーを電柱にはりめぐらした。援農を理由に、各同盟員宅を訪れ、同盟幹部の悪口を言い、数時間にわたつて農業を妨害して来た。はては同盟の役員会たる金曜集会に他地域の共産党員や民青を動員してとりかこみ、組織だった拍手と野次で再三にわたつて議事を妨害して来た。この間「ちば民

報」なる機関紙を同盟内にバラまき、幹部に対する中傷を加え、同盟内に混乱と疑惑を生んで来たのだ。

一体これが闘いの支援であらうか、

一体誰れが三里塚と芝山の主人公なのか、

同盟の決定を踏みにじり、同盟の制止を無視し、同盟の幹部に中傷と非難をあびせかけて来たか、自分が三里塚闘争の主人の如きふるまいをするこの行為こそ、すでに反対同盟の基本原則をはずれたものといわねばならない。

そしてこれら行為は支援ではなく同盟の混乱と分裂を生み出す事なのだ。問題は単に三派全学連や反戦青年委員会の事ではないのだ。同盟の、闘いにおける基本姿勢にかかわるものといわねばならない。

そしてこうした行為を重ねて来た共産党は先日きわめて重大デマ宣伝をおこない、反対同盟を傷つける言動をして歩いた。

共産党は「瀬利、石橋、内田の三氏が二重堀に四町八反の土地を代替地として買った」という「事実に基づいた発表」をし、反対同盟員に流して歩いたのだ。

この事実について、瀬利、石橋、内田の三氏は、現地二重堀に行き、この事実の内容を確しかめた。その結果、代替地を買ったのは、この三氏でなく、天神峰に住む越川正治氏であることがはっきりした。越川氏はいつでも証言に立つと三氏のところに申し入れて来ている。

同盟員のみならず、この事実をみても、誤まった報道をし、反対同盟員の団結を崩すような共産党に対して、我々同盟員は、もっとはっきりとこの実体を見つめなければならぬ。

その上に立って我々同盟員はお互を信頼し合い、過去の闘いを無意味にせず、勝利の展望をみいだすまで闘い抜いて行く事が我々の責任でもあり義務でもある。

数カ月の新たな試練をくぐり抜け、不屈の強さと団結を持つ時、勝利は三里塚芝山連合反対同盟の手にあるといえる。

同盟員のみならず、混乱にめげず、勝利に向って前進しようではありませんか。 一九六七年十二月十五日

「成田二四時」放映中止を嚴重に抗議する。 急に放映せよ！そしてTBS労組の弾圧処分 撤回闘争を我々は重大な関心を持って見守る。

新国際空港建設反対三里塚芝山連合反対同盟

四月二日放映予定のフィルムドキュメント「成田二四時」が放映直前に一方的に中止された。当局側はその理由を

(1) 編集者の過勞

(2) 取材中の車に、婦人行動隊、並びにプラカードを乗せたことを指摘し、番組内容偏向の二点をあげている。我々はその理由に決してごまかされはしない。一人や二人の編集者の不在番組製作に決定的打撃をあたえるほど放送機構は脆弱ではあるまい。権力者がいかなる理由をつけようと、我々闘う農民の主張と行動を反映した「成田二四時」の陰、ベイに対して、我々はマスコミに向け新たな失望と怒りを強く覚える。

婦人行動隊とプラカードを運んだ車を、検門の際には通過させた上で、放映直前に中止の言質とした権力側の巧妙な手口。現地取材時にありがちな便宜供与行為が拡大、歪曲され、小林郵政相の今道社長への脅しは、なによりもまず露骨に新国際空港反対運動の分断を意図するものといわねばならぬ。

にもかかわらず不幸にも我々は、その事実を驚きはしない。あまりにも日常的に頻発するマスコミに対する弾圧であるからだ。しかし我々反対同盟の闘う農民は、はっきりと宣言する。真実の報道を歪曲し、虚偽を報道させる権力の弾圧、あるいは、その攻勢を身いっぱいあび分散化を強いられる放送労働者の後退も許さない。今は「成田二四時」の放映中止を契機に、ひとつの真実を報道するTBSの番組関係者と、それを支援するものの主体性と役割の認識がどこにあるかを明確にすべきである。

我々農民は知っている。電波法改正、NHKの国営化を指摘するまでもな

く、七〇年安保に向けて権力側はマスコミのあらゆる機関を自己の支配下に組み入れようともくろんでいることを。そして体制の矛盾を武力で陰、ベイすると共に、激動を拡散させるためのマスコミ統制に血道を上げていることを。マスコミは、すでに権力に身売りをしてしまったのだから。

あなた方報道人は知っているはずだ。この空港反対闘争の現地では、マスコミに対する根深い、反発と憎しみが生きつづけていることを。我々の叫びと怒りの行動は、つねに報道の中立性という美名のもとに歪曲こそ、主張が無主張に転嫁され、微温化されてしまう。

我々はどこに語りかければ良いのだろうかマスコミはこうした現地農民の反対闘争を分断し、封じこめのための積極的役割を果して来たといわざるを得ない。

歪められた報道の中で、農民は、ますます人間的なものを追求している。

その重荷を共に背負うことこそ本来マスコミの良心と栄光ではなかったか。

歪んだ報道に対する現地農民の怒りは、今後、歪んだ報道陣を三里塚に一步も踏みこませることがないことによって証明されるだろう。本来、TBSは闘争する農民を分断し、真実を私有化する権利はないはずである。我々農民はTBSに向けて再度宣言する。

あなた方は国権力の言語道断な弾圧の中で闘っている現地農民の闘いを支持するの否か。

TBSが権力の道具と化し、現地農民の分断を意図する現段階においては今後一切闘う農民の現地取材を拒絶するだろう。

それはあなた方報道人の報道機関としての機能のまひでなく、自ら生み出した事であり、報道にたずさわる労働者として思想と自己主張と表現との決別である。

我々農民は、あなた方がこの「成田二四時」処分撤回闘争を通じて自己の人間性、報道人としての自己の表現方法を奪取した時点から、連帯の意を表明する。我々は今、まやかしの闘争は必要としないのだから。そして「成田二四時」は絶対に放映すべし。隠す者がいる限り、我々は真実を知る義務と権利を持っている。「成田二四時」が、我々現地農民に提示された時、初

めてのあなた方報道関係者と農民のコミュニケーションは生れるだろう。

権力側のいつもの手段である処分。責任所在の霧散は許されない。我々農地はあなた方の作品奪取と弾圧処分撤回闘争を重大な関心をもって見守っている。 昭和四三年四月十一日

抗議文

日本の近代化の美名の下に強行されようとしている「成田新国際空港」建設は、何らの配慮も持たずに、ただ支配者と極小数の独占資本家の利益追求に終止し、我々現地農民の生活と財産の保護、生命の主張を一方的に脅かすものである。

これに対し、我々農民は自身の存在を主張して、現在の反対運動を推し進め、さらに我々を支援する人々とは、党派を越えて手を組んでいこうとしている。

しかるに真実を報道すべき責務を負ったあなた方が、その正しい役割を何ら果さないのみならず、真実を歪めて伝えていかに強い怒りを持って断固抗議するものである。

現地農民である我々が反対を長びかせることによって、地価をつり上げようとしているといった馬鹿馬鹿しくも無内容な報道は反対運動が、我々の心臓の鼓動と血流の通った土地を守るためのものであることを見落している点で、全たくの嘘報であることを自覚しなさい。

又現地で支援する学生と農民の融離についても、数回の闘争を通じて、学生が真に我々を支援していること、又幾多の会話と交流を通じて、お互がますます結束を深めていることを正視するよう求める。

さらに、去る四月二日の「成田二四時」が、一方的に小林郵政相——政府の圧力によって中止されたことについて、撮された者である我々は、当然の権利として、その撮られたフィルムの公開を主張し、即時放映を要求する。

外部からの圧力それがどのようなものであれ——それによって真実が隠され続けるならば、その時は、あなた方報道関係者は、その責務に伴う良心

と主体性を放棄したことである。
この状況の中で、生命と生活の主張をする現在の我々に、正しい報道の姿勢と目を向けるよう強く求めて止まない。

昭和四三年四月十一日

成田新国際空港設置反対

三里塚芝山連合反対同盟

TBS社長

今道 潤 三 殿

三里塚救援アッピール

三里塚空港阻止のたたかいは、まさしく国家権力と反戦平和、民主主義を志向する市民、労働者、学生の手を闘いとして、そして直接的には「三里塚空港反対同盟」と「機動隊」との熾烈なたたかいとして展開されています。

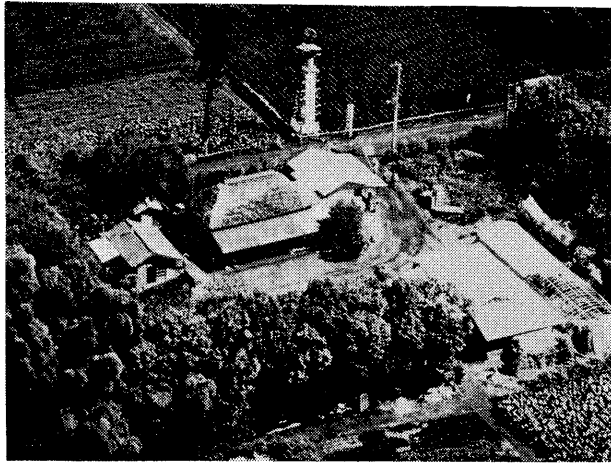
この闘争で機動隊の暴力行為によって、傷ついた人の数は累計二千名を越えており、現時点で起訴されたもの三九名となっており今後訴訟費用だけでも保釈金の他に百万円以上は必要と思われまます。

その他反対同盟、弁護団、常駐支援団体等に対する物的、精神的支援が数多く必要です。わたくしたちは、羽田十、八救援会、玉子闘争救援会のみならずの協力を得てこのほど「三里塚闘争救援会」を結成いたしました。救援会の活動としては被告団三九名に対する訴訟カンパ（弁護団費用、放費、調査費）医療費衣類（雨中での激闘に必要）その他のカンパ、それにニュースを発行します。またわたくしたちの活動は、すべて反対同盟、弁護団との密接な連絡のもとに行なわれることを明確にしておきます。たたかいが、重大な局面をむかえつつあるいま、みなさんの支援を心からお願ひします。

三里塚闘争救援委員会

（代表）千葉市稲毛海岸五の五二一四〇六（渡辺一衛方）

現地案内



天神峰現地闘争本部と副委員長、石橋政次宅全景

天神峰現地闘争本部
成田市天神峰四二番地にあるこの本部は、石橋副委員長宅の敷地内にある。昭和四二年十二月に設立されて以来、闘争の最も中心地となしている。反対同盟の日直、宿直員がつめ、又常駐の全学連学生諸君のいる所だ。

駒井野団結小屋
四千米滑走路予定地の最北端にあるこの小屋は、大きき約四坪。昨年一月末以来全学連現地闘争本部のおかれていた所であり、これまででの闘いの前哨基地となつて来た。学生達はここで自炊して生活している。

天浪団結小屋

四千米滑走路予定地の中心点に位置し、昨年四月と七月の過程では、駒井野と並び、これも重要な闘いの基地となった。毎日、日直員が行き、パトロール隊が見まわりに行く。

芝山町闘争本部

芝山地域の闘争の中心地であり、千代田農協の中にある。天神峰闘争本部と並び、反対同盟の闘いを支える一方の柱といえる。ここも又、反対同盟員の日、宿直によって守られている。

△現地へ来る場合△

闘争が開始されて以来、現在まで現地には数千名の人々が訪れ、反対同盟員宅に民宿していった。ここで簡単に現地への道順、又現地来る場合の心得のようなものを紹介しておこう。

成田までは京成電鉄、又は国鉄成田線を使って到着することが出来る。天神峰行きのバスは京成電鉄成田駅前から、栗源経由、小見川行きのバスが出ているがこれに乗車して約二五分、料金六〇円で現地につく。

「今晚泊めて下さい」とよくやって来る人がいるけれども、次の事は心得てほしいと思う事である。

闘争中の現地に来るということである。闘争本部は全ての真面目に闘う人を受け入れようとしているが、厳しい現地の中に入ってくることを知っておいてほしいと思う。民宿する時、反対同盟の人々は訪れる人を快くひきうけてくれる。だが、訪人は、民宿代、食事代を払う事はもちろん、そのお宅の人と共に起き行動を共にしてほしい。そして出来れば一日の援農にたずさわれば反対同盟の人々は喜んでくれる。食事代一食五〇円、一泊百円。

現地にくる時は、反対同盟の事務局、闘争本部に連絡し、確認してほしいものである。

空港公園や権力は反対同盟やわれわれの知らない人間を送り、内部の捜査をしようと企んでいる。反対同盟を通しておくこと、これは又訪人の常識といえる。

現地への連絡、支援物資の送り先は次の所である。

成田市天神峰四二、天神峰現地闘争本部

關う三里塚 第一集 第二版

發行 千葉県反戦青年委員会現地闘争本部

(成田市天神峰四二、天神峰闘争本
部内)

定価 一五〇円(〒五〇円)